

持45

111

新川渡龍



新川渡龍
白粉

雪解川浪の龍序

富士の白雪や朝日で解る。解れを同じ素の水。氷の流れと人の身の。上登れば降下る世のならひ。習ふまいぞや不義の道。道は叶わぬ半淵典臆。善を悪める佞姦邪智。智謀を深く廻らして。爲てヤツマリと思ふ中。家中又一人の金田あり。蟻の穴から堤のたどへ。譬へ方無き陰謀も。泄るゝ造化の配劑に。西よ春く大陽の昇りて照を大平海。海路幾萬霞ヶ關の閑晴けき春よ雪解て。堤上幾千隅田川。川の漣浮ふ花。花は紅色緑の柳。柳は緑ある柳葉亭。亭主の代りに不解とを音の如しと。説き待る

明治十八年月日

鼓腹山人

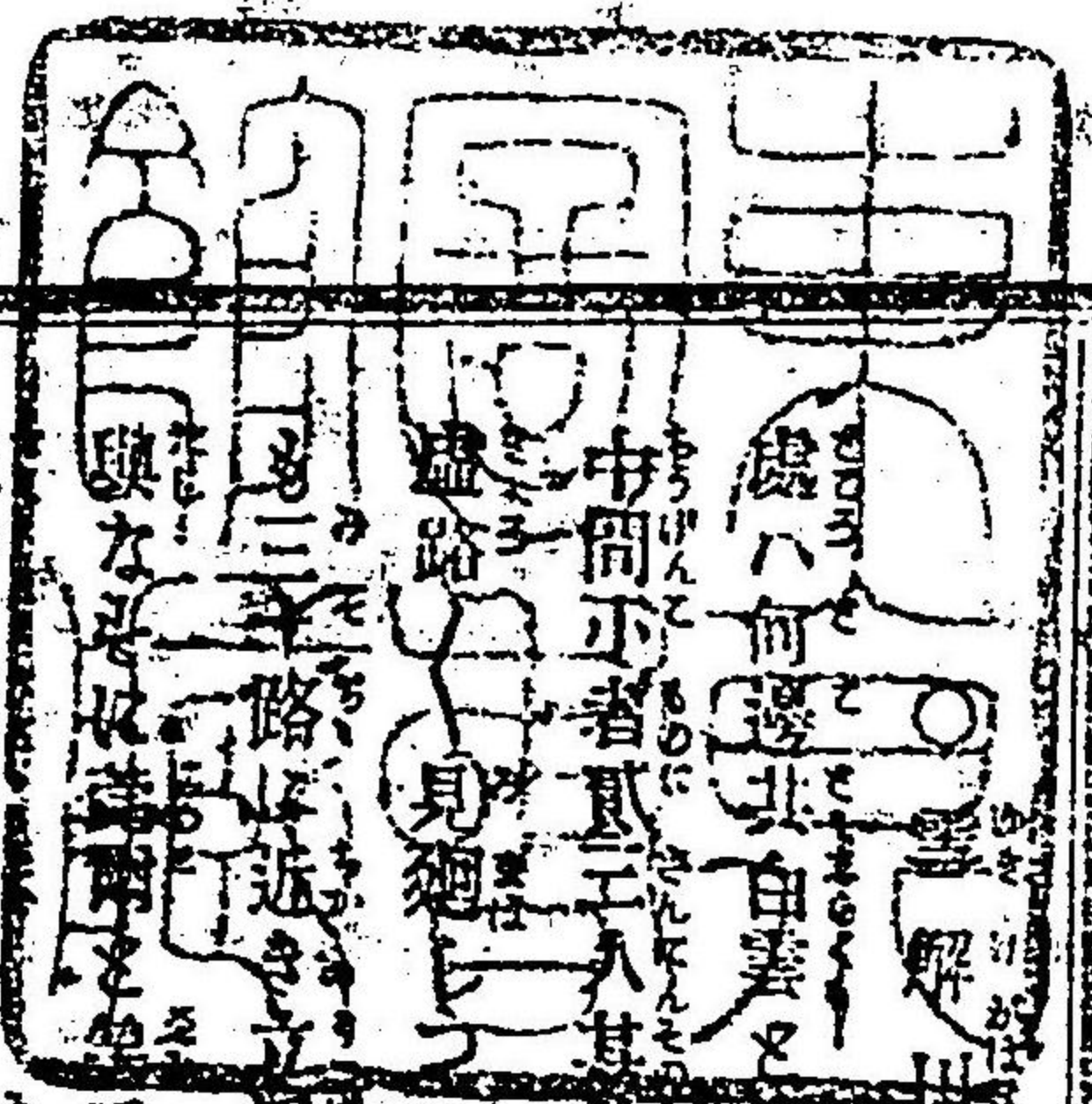




源氏物語



- | | | | |
|-------|----------|-------|-----------|
| 第一回 | 虎狼之奸人磨爪牙 | 第二回 | 名月被覆于月 |
| 第三回 | 賈女事托勇婦 | 第四回 | 歸燕得浮木漸達陸 |
| 第五回 | 自陷計全其身 | 第六回 | 吊籠鳥而為籠鳥 |
| 第七回 | 叢棘苦梅花 | 第八回 | 忠臣使愛兒謀外事 |
| 第九回 | 追虎而得兇 | 第十回 | 忠臣為刺客落命 |
| 第十一回 | 免萬死烈女叩庵 | 第十二回 | 為賊牝鷹 |
| 第十三回 | 見賣于市魚再歸湖 | 第十四回 | 烈女不圖遺勇士 |
| 第十五回 | 蚊蠅不斲則害身 | 第十六回 | 櫻花解語賢婦口閉 |
| 第十七回 | 梢上雪積松將折 | 第十八回 | 密出金殿入茅舍 |
| 第十九回 | 幽窓得遺書愈悲 | 第二十回 | 得于瓦礫之中名玉 |
| 第二十一回 | 臨死一婦復本善 | 第二十二回 | 天使孤忠之臣逢義女 |
| 第二十三回 | 義女殺身而解圍 | 第二十四回 | 天漸定而奸賊服制 |
| 第二十五回 | 雲晴月明別邪正 | | |



第一回 東京 柳葉亭繁彦著

虚ハ何邊其自妻と見紛ふ花の樹の元ハ片寄て有る轎子は大家の女中の花見と思しく
 中間小者數人其餘ハ渾て樹の元を彼地此地と遊びて居り折柄遊人の若侍ひが何か
 見廻して、頓て相圖の嚇なると此方の樹の間を繞りながら立出たるは年頃
 三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

葉の終るも俵と懐中搜索典膳が取出したる以前の包み「兼て兩人心と併せ主人の家國押領なし榮花の夢を結ばんにハ真魁の一品なれば御近習役の三平を欺る賊して味方よ着け漸く我手に入れば早此上は落度と見出し殿と押込め幼君を大守と仰ぎ諸共日頃の志望と貫き申さんツテ又御身が御所存へと云ふに此方も景容み「平日からして御疝氣強き殿の氣質は能く知りたれば斯くくなして怒りと起させ手打にせると韓めく處へ御身透さず走り寄り發狂せしと云ひ拵らへ兎も角もして一室へ押籠めさて其後の手段は云く斯くくなして世間と掩はば大望成就ハ一瞬くハ只何事も夫迄は互ひ其身を謹しみて忠義だてする奴輩に覺られぬのが肝要なると是彼耳と取代し語ひ果し其所へ付の女中が口くは部屋さまは何れにぞお梅さまくと動揺めき呼はる聲聞付て見付られじと兩人ハ左右よ退きて別れしが此時ほぞも樹蔭に在つて兩個が素振りよ眼と注め容子と窺ふ武士ありしが既に兩人引分れ四邊に人も有ざるゆる其所へ立出影見送り「今のはお妾お梅の方今燈人ハ年若な

が君寵に依り家老となりし牛淵左次馬が一子の典膳彼何故人目を忍びお梅の方と密談なせしか察せるところ君侯の御目と掠め奸通なし不義を働らく者なる可し我目よ羅るも天の誡しめ忠義の輩を誅らひて大事よ及はぬ其中に成敗なさづば未始終殿の御名に傷く可し這は奈にして善らんと手と供きて思ハすも己か足元お落して有し一封の書翰手に取り上げて打領き「不忠義よ手よ入る此密書之を證據に兩人共今にぞ思ひ知せて呉んと忠義よ凝し武士が怒氣と含みて我知らず教團後ろよ立寄りたる悪人加擔れ若侍ひが夫遣つてはと無二無三密書と奪ひ取んとするを彼武士は身を轉し左右に外し付入て脾腹を丁と蹴たりしかば何かは堪らん傍に立し櫻の幹へ支体を打付响と叫びて倒る物音彼武士は啊々と一聲高く冷笑ひ頓て其場と立去けり

○ 第二回

大夏高樓巍々堂々茲は所も大名小路大領正道公の上屋形巳刻の漏刻の響と共に一間を出る家老の典膳跡に續いて笹川三平横堀藤藏と始めとして多くの佞人列を正し食

一様に居並たり其時典膳四邊を見送り「兼て御邊等一同と心を併せ大領と押し付て
お梅の方の設けられたる若君を家跡目に引直し忠義立とる老臣等を追退けて我
々が榮耀榮花と極めんと先づ第一に家跡の重寶大閣殿下秀吉公より頂戴有し御威狀
瑠璃雀の御香合其外當家重代の重器を竊かに盗み出し皆某ヶ手許よあれば事を起
そは此時なりと云ふは笹川横堀等々しく席を進み出「我々とても御家老の日頃御恩
を蒙れば悪事を知つては同意なをも君を思ふハ身と思ふ立身出世か致したさシテ我
君を押籠る手段の脚色ハ如何でござると詰ると典膳打微笑「拙者が工風ハケ様で御
座ると」笹川横堀兩人へ耳打なせば兩人より登人く「耳打なし然らば部屋ハ梅
の方にと云ふを典膳手と以て制し件の計義ゆき届かば御前に於て時分と斗り拙者が
相圖と致そのとばれば俟ちなされと叩く折次の襖と推明けて茶道珍阿彌兩手をつき「
只今御前で御酒宴始まり平日の如く各位を疾く召との君の御上意急いで出仕召れ
よと述て直様引返と跡見送りて典膳三平其外一味の悪人輩顔見合せて立上り領合ひ

て入りけり「館の大領正道公と申そハ元來英智の君よして廣く文武材にも長じ
家謀をも憐れみ玉ふ明君成しがさきにお屋敷のお出入なる刀屋宗七の娘お梅と云へ
ると妾よせられしに此お梅絶世の美人にして春のはなの匂ひ出るるか秋の月の雲
と吐て顯ハれ出し異ならざる姿色なれ共至つて奸曲邪智の性よして巧みは媚と献
じ君寵よほこりて私おほく刺へ家老牛淵典膳と人知はず不義密通となし、より
種々の悪計を計較大領の御簾中は公卿何某の姫君よて貞實の女性よれ在すと説言
と搦へて御交誼と遠ざけいまハばや自願一人は權勢うつり恰かも奥方と經上りたる
斗りなればはくの女中の其内よ心能ぬ者共は皆彼門よ媚へつゝひれ部屋さまと
が稱へける情も愛まお梅の方はかねて牛淵典膳と手許とあハせ大領と一ト間に押籠
め幼君の饒若君の御代となし思ひの儘に榮花を極め不義の快樂と執らんとて秘に時
節と伺ひ居もが正道公は幼少より疇癖強く何事も一徹短慮よお在せまほそ之と工み
は種となし或日御前の御酒宴も榮たる後にお梅の方の部屋へお出よなりし時大領殊

以愛し玉ふ價ひ尋み春園の鉢を我手に持出しつゝ、驚
 き慌て散りたる土と掻奇せなが殿の面都へ打當しかは性質氣早き正道公何かは抑
 へん大ひよ怒り「我が最愛の春園を我が面前よて眞此如く鉢まで碎き其上よ我が面
 上へ塊を打當ゑるハ奇怪千萬、寵よりて無禮をなと悪く女め退去居れと平日
 よ似合すのり怒らす最も烈しき大領の憤怒様よか梅の方は兩手を付て頭を撞ひ
 其れ怒りへざる事なげ淡き女子の鹿相ぞと海より廣き御心に何卒おゆるを遊ばし
 ませと只管詫ても大領ハ元是性急一徹なれ不極ケドく」と詔ま玉ひ汝が如き無禮者
 余が目通りハ叶ハぬ程に疾を退そき謹しみおれよと隣と白眼つけ玉ふ此時迄もか梅
 の方は只打詫て居たりしが何思ひけんづかくと殿を透りへにじり寄り「僅かの鹿
 相と斯く迄に咎め玉ふハお情なし奈に御秘藏なれば逆妾の身とは草木に代へて悪ま
 せ玉ふとは御心強きなされかた君に捨られいつまでか命て甲斐無きまが身の土猶此
 上のお慈悲には御手にかけて玉はれかし命を交え捨るのが寶泉へ参り一ツの願ひい

さあ手打に遊ばされよと覺悟極めて疥癬の強き大守に怒りを起させ我が術中よ陥さ
 んと計りし工みぞ恐けれ殿ハいよく怒らせ玉ひ「自個が罪を罪と知れば余が詞
 を不用ふぶき賢えら立て云ひ込るその舌の根とまり斷ちて望みの如く手討にせん
 と佩刀取つて立上り切捨玉ハん御景容なれば御前よ居なふ女中の面々前後に立て
 取支へ何卒御心返させ玉ひ此義を免れ遊ばされよと異口同音に詫つれ共請引賜ふ
 容子も無く突のけ取のけか佩刀と閃りと引抜きお梅の方とあハや切らんとなし玉ふ
 此時次れた坐敷より典膳三平藤藏などと兼て期しある事なれば三人等しく走り出殿
 の御手よ取継り矢庭に一刀もぎ取りつ、「コハ我君にハ何故有つて罪なき者と殺戮
 し玉ふ今大平の世の中よ頼に人を害ひ玉は、專殺の罪免れ難し何卒思ひ止り玉へ
 と云ふと大領耳にも入らず「要なき諫言きく耳持ぬソコ逃げ典膳三平と宣ひながら狂
 ひ玉ふを仕済まゑりと悪人輩押取り込て一室へ誘ひ君には俄かに發狂せし逆堅く押
 込め朝夕の飯の通ひと腰元の淺路一人よ打任せ仕合せ善しと悦び居る肚裏こそ不

敵なれ

○第三回

却て説く岩淵典膳は類ハ友なる逆臣共を語らひ首尾能く大領正道公と幽閉たれば此
 上は心安く計義と廻らし若君鶴若丸の御代を爲し暴威を震ハんと愛妾お梅の方とも
 種々相談と遂けるが元來當家の重臣なる金田鞆負ハ文武兼備の英傑よて殊も忠義の
 志し深き者なれば典膳等が舉動其意を得ずとて大領の幽閉と密かに窺ふ趣きなり
 と知る者有つて告しよす斯くては謀計露顯の基よて我が一身の大事なれと彼三平と
 藤藏へ思ふ仔細と叫さ示し報負と罪は陥さんと専ら計較を施さしけるが其頃館の侍
 醫ありし諸坂童齋と云ふ者ハ其性邪智の佞人なれを怨を以て味方よ引付け大領賢よ
 發狂して人事不正の容体なりと飽く迄醫按と指示さば先づ此方ハ安心ならんと或時
 諸坂童齋を一室よ招き聲打低語「御邊は當家の醫官のうちにて最故老の人なれば態
 く此座へ招たしも別義にあらぬ大領の人事不正の御病症此程一ト問へ押籠めまわ

らせ時々御容子も伺へを中く鎮まる御氣色なく益々無狀に萎らせ玉ひ御家の安
 危に係りある一大事件と我々も晝夜心配致して居れど何を申すも御幼稚より痛辯強
 き御氣質ゆる容易よ本復爲し玉ふ目的なければ詮方なく御幼君なる鶴若君を御家の
 跡目に推直し御痛ましき事ながら大領には御隠居遊ばし寛く治療の効の相立や
 う取斗ふより工風もなく勿論時侯の工合にて平日に替らず見玉ふ事の無よハあり
 され共其邊は御邊の胸も有るべし此こと全く行届かば御家は愈々長久にて御邊
 の忠義も莫太ならん篤と分別せられよと思案ありげよ説論とと意盛意中に半分ハ悟
 り四邊で見廻し膝推進め「仰せ奈にも御道理至極愚考も兼て御貴殿の愛ひと爲る
 心腹の病ひと治を療法お疾くにもお耳へ入置おく思ひながも折無くて今日迄
 黙止ひと云ふ典膳膝立直し「諸は御邊も某らが意中の病苦を察しられ御治の効
 と立んとて疾くも醫按を爲されしとは最耳寄の事なるが然ふして貴老の所存と云ふ
 ハ奈なる事よてござるぶと言葉急しく訊問ぬると童齋莞爾と打笑ひ「御邊等窺よ徒

黨を結び大守を幽閉なし玉へを諺よ云ふ頭と包み足を頭はと次第よて裡にハ忠臣
無二なる者あり外にハ奥方夏姫様はハ御續きのある閣老職相時權勢比等なき御身分
柄の御方あり併し忠義の御家來あり共开ハ御家老の侈心一ツ追退ける工風もあれど
愚老が氣遣ふ大事と云ふは奥方様より件んの事を通せられなば兩敬の縁故を思され
今の世の國手と稱する交川院と必ず館へ差向られ御容体とば伺ハれなば多日の計較
忽ち破れ其折こそハ御邊等も争で無事なる事有ん童齋甚だ至愚なれども深く此義と
御察し申せば御邊の分別を伺ふうへ手段は無きよもゆはなと億と色なく陳しのは
ひと病して太息と吐きし典膳儘に顔色と利らげ「思ひしよりハ儼りたる貴老の心慮
誠は當れりシテ外患と除く可き貴老の所存は何とぞると問れて童齋打點頭「交川院
ハ將軍家よも殊に御最厚くして勢ひの有る醫官なれば渾能く事と治めんには多く
の黄金の入る事なるが其邊に御懸念無き事なれを愚老寄り「手變々索め只今申せ
し場合よ至らば充分力と盡とべし携へて侈記慮遊をされなと飽くまで翹びて典膳

の心と結び諂諛ふに岩淵始め三平藤藏其外一味の逆臣ども最頼母敷心ちして是よ
り徒黨よ差加へしとぞ夫ハ倍置き奥方なる夏姫君ハ不意き此度ハ御事よ打蕪かれ女
中を以て時々刻々御容体をば尋訪玉へを逆臣共の兼てより腰元淺路の其外には幽室
の裡へ通ハせねば委しき容子も知れ玉はず司じ館中なか尾上隔つる心地して歎
き哀しみ玉ひしか年頃情けと懸けられし浮舟と云ふ侍女は萬づに心も利たれば思ふ
由とぞ叩き玉ひ御賢家に由縁ある時の閣老何某殿へ御消息を送られんと其手積を示
させ玉ふに浮舟委細に畏り素より雄々敷性なれば己れが親の病氣と云ひ立差向より
一週日御暇を頂き我家へ歸りて翌日行粧と調へ彼何某公のか屋敷へ供をも運せ只壹
人秘かに赴き大領の御身の上を言上なして愚人輩の奸策と打碎んを盡力なしけり

○ 第四回

諸も奥方夏姫より内意を請て一大事の使ひよ立し奥女中彼浮船ハ前回に掲げし如く
閣老の何某公の役邸へ移し赴き悪人の計較に罹りし大領と救ひ出して奥方のか心を安

めまらせんと獨り點頭立出し茲へ處も長の口入相近き黒火頃何隊にか折助共が前
後に立て聲張上げ「貴嬢ハ確かお館の奥方付の浮舟どの奈なる御用か知らぬ共供と
も連ず形粧を窺し此夕暮に單身此邊を彷徨ハ定めて容子のある事ならんと云へば
一人が語と繼ぎ「可内和主の云ふ如く奥様よりの御内意にて當時天下ハ權勢ある何
某どのへ密事の御使者と見たハ曲眼か我くも兼て幽家老典膳さまより申付りし事
あれば貴嬢が持たる其密書渡して仕舞へと立楚り矢庭よ奪ひ取らんと爲るを然ハ爲
むとて浮舟ハ小蝶の如く身と轉し「輕き身分の中間風情ケ何人ハ頼まれたか妾の持
ぬ此密書に心と懸るハ不審の第一無禮しやると用捨は爲ぬ予と景狀れば折助共は些
とも恐れず打笑ひ「女だてらに無益の荒言然ら強面よ出るからハ具つ此通りと木刀
引抜き打て楚るを事ともせず左右に外し立働らき隙と索めて逃んとすると折助共は
付入て猶も烈しく打込み來る犬の漢の三人に此方は軟弱き女の身もある心ハ矢竹に漂
俾れども勢ひ盡きて手籠に台ひ懷ろよせし密書をばあはやと思ふ其所へ一人の武士

出來たり此形狀に尋時と措ず走り寄り折助並と控と投げ刀の柄へ手と懸けて「汝等
不敵ハ雜人ども若し此の上にも手對ひ爲さば首と並ぶる覺悟を爲よと反打返し詰寄
にる素より賤敷下郎の哀しさ叶はぬ免せと鼠の如く首と抱へて逃去たるに浮舟贈し
く小腰を屈め「何れの御燕の御方様かつひよ見知らぬ貴殿が危ふき場所とお救ひ下
され大事の使ひに撰まれたる役目ハ疵の付ざりしハ此の上も無き妾が洪福有り難ふ
ござりまると云ふと此方の侍ひハ「イナ氣支はれな 某も御身と逃れぬ筋あるもれ
よて折能く茲へ來合せしは實ハ意外の首尾なり併し此邊は往還ゆる何かの事ハ某
ケ主人の屋敷へ歸りてのち悉一お聞申そべく誘 某と諸共此方へ御出ある可しと
何か仔細の有氣なる容子よいと、訝しく浮舟は詞と改め「御心切なる仰せなれどか
顔ハ勿論お姓名さへ知らぬ背殿と諸共此方へ参らん事も形義し妾よ逃れぬ筋ありと仰ふ
せ有しは奈なる事か貴殿の御主人はと言ふと此方は打點頭「不審と思ふは道理千載
拙者は閻老何某の御内に於て其許のお主と傳く夏姫さまには由縁も深きお續きある



斜

御家來筋の者にして其名は高岡節藏なりと名乗るに浮舟驚きて「扱は兼く奥方様より此障さ有し高岡さま何して此場の難義とば」「サレバ之よも譯ある事向は兎もあれ疑ひが晴なば拙者と少しも早く屋敷に來ぬれ御主人より仰せ付りも御用向と果さる、のが簡要ならんと論とに浮舟打悦び「然らば貴殿と御一所に」「さア斯ふお出なされよと戀にハ有ぬ二人づれ折目正まき武家育ち打揃ふて立去りけり「情も高岡節藏ハ侍女浮舟と同道なし我家へ戻り件んの事と具に聞て少邊も措ず直よ御殿へ飛出夏姫君の御消息と秘よ君へ捧げしに子君候も強く打驚かれ是は勿論に成難し早速醫師と差向て病狀の實否と查と可しと兼て名醫の聞えある交川院と召呼れ最嚴そかよ課せしかや法印委細に承して頓て御前と退出つ、支度調へ大願の上屋敷なる大名小路へ籠輿飛せて急ぎける

○ 第五回

道と以て欺けば聖人も陥ると况や凡俗とや情も交川院法印ハ閻老の命と所條ち籠

興と飛せ大領正道の藩邸へ到りしかば玄關より來由を陳るる番士は直ちに書院へ誘ひ此盲家老典膳へ執達せしに予典膳ハ兼て童齋と計義と廻らしめれを自個が誥所へ密かよ招き件んの始末を呷き示そに童齋屢く黙啞て頓て其坐と退きしが衣服を正し書院へ立出恭しく口誼と陳べ「只今家老牛淵典膳御目通りを仕れど某し事は豫より御目を賜はる面己ならず當家醫官の事なれば主人が病苦れ様子とも言上せよとの指圖を請け失禮ながら拜謁せりと最懇熱に陳るる予交川院も會釋なし正道の容体杯を具に訊問て有ける際に典膳は嗽して一室を出交川院に面會なし閑老よりの來意と謝し誘て奥へ案内爲そに其邊の手筈の有たる事か若侍が出來り「今日慮らず閑老より御身分柄の御方様が太守の御病氣を見舞ひに御入來ありし事よつき貴殿と驟のれ召にござれば直ぐに奥へ移出仕めれと云ふと典膳聞掛て交川院より打對ひ「ね聞の如く奥方より貴殿の移入來有しよ付何事やらん某へ用掛これある趣なれば主人の居間へ童齋もて移案内れば致さそ可し暫時の間退坐なると無禮ハ免玉へる

べしと挨拶なして立別れ杉戸の裡へ入敷と見送りなが童齋ハ膝を進めて聲低め奈なる事か交川院を語ひ果て先に立大守と齒閉爲し置たる一室へ頓て導くも無懸やな大領は逆位どもの奸計にて健な身も閉籠られ籠中の鳥も異ならず朝夕親しく來る者は淺路と呼る、元腰のみ夫とら四邊も憚りあるよや物も言ねば籠の形況奈も思ども聞出と便宜も有らで肝向ふ肚裏一ツに打歎き罪無て見る配所の月の憂き島守も坐りたる身と果なみてお在し、よ腰元淺路は例れ如く午發と携へ大領へ進め參らせ引下りし跡も何やら認めし一個の文の投込み有しにコハ訝と取上げ玉ひ南の方よ聊かの明り有るをば力らとして打披き見玉ふに

此度の變事奈もして救ひ奉らんと存じ計り得共慰ひの事仕出しはては此末如何成せ玉はんかと心なむす日を過しひひまよ今日何某さまより交川院どのと申ぞ移方御出に相成由然れ共惡人共兼て手筈を定め之あり右仕御方おも已れが徒黨に引込そい言較よて容易ならざる事どもに付眞實御狂氣の体入せられ

しばしく時節と御儀在せられ様恐なが奉存ひのしと
と赤心紙面と顯へれたる腰元法路の筆なれを大守は只管感じ玉ひ悵然として在せし
處へ誰や人の來る音爲しに驚て、文と押置し寄めよ容子を見おれける

○ 第六回

借も彼正道公ハ腰元法路が心を籠し忠義の密書を打披き讀み了りたる其所へ茫然と
して來る者有るよ驚き慌て、取隠ま來れる者を寄かよ見るよ是ぞ諸坂童齋が交川院
の先に立ち一室の景狀を窺ふなりとは其面貌よも顯へれたる大守ハ忽ち聲振立有
れぬ事を罵り玉ひ又呵く「と打笑ひ更に人事の有ざる様よ深き所存の有事とは紫よ
り心も着ざるゆゑ且は驚き且は悦び童齋屋々後邊よ見返り交川院と面を合せ御覽の
如き主人の病狀 此旨宜敷御披露あれと云ふよ點頭く交川院が「思ふに勝りし大守
の御様子某し委細よ見届けたり恁れを萬事を意中に包み御前適宜に取成やさん典膳
殿へは其許よりお傳へ召れと鷹揚に式禮なして立戻ると童齋厚く勞ひつゝ自ら先へ

走り行き御立ザウと聲懸て若侍等と詰共に立關までう見送りけり「情も奥方夏姫
れ内意と受て閨老の屋敷へ立越慮さずも高岡御藏よ逢ひて密事ハ使命と全く爲し彼
浮舟は屋敷へ戻り云々と奥方へ其概略を言上爲すよ是より先に交川院既に御館へ參
りし事ハ疾く奥方も知おれたれば心盡しの甲斐有たり逆悦ひ思と處も互浮舟が忠義
を稱し數々の引出物と玉はりて閨老よりの音信と待れたるよ翌日忽ちに文箱到來せ
しよ夏姫は取敢ず浮舟して披かき玉ひ始終と讀玉ふよ往日御中起の事交川院を
以て診察せしに事實に聊か違ひ無れば是迄なりと諱らめられよと意外に出たる文
面なるに顯みの綱も切果て最、涙よ伏芝に樵る斗りなる奥方の歎きと然そと浮舟も
暫らく涙に沈みしが丈夫も及ばぬ女子なれを詞と設けて種々諫め「其か歎きは道理
ながら此義よつきては妾も思ふ仔細の無きよもあらねば御心易く思されよと取辭
て其夜ざり自個が部屋よて情々と緯の始終と察するよ閨老よりの御見舞なる交川院
は將軍家の重んじ玉ふ國手あれば大守の御病氣診察れ現存かば陳らる可きに却て事

實の御狂氣なりと誣言と以て彼君と欺むかれしハ訝しく是より事由の有ことなるか
左も右ても悪人輩の欺謀と知れば此上は我身と犠牲又證據と見出し病て久敷出勤無
れを兼て忠義を見抜れる金田鞆負と心を併一日も疾く天日と拜し玉ふ御身と爲志御
恩は報へで措可かと胸を定めて立上り禱端折て寄やかに雨戸押明け燈籠の火影と的
中庭の池の蛙も我が爲に聲な止そと窺ひ寄り大守の幽閉せられたる一室の椽よ近
づく折誰とは知らず一人は壯士是も同じく扱足して築塙の下へ探り寄り一折戸に手
を懸て互みに驚き飛下り左右等しく窺ふ時月は彌々雲入り如法暗夜と成ければ彼
壯士ハ便宜を得て取られし鎧と返返し築塙を越んと舞くを浮舟透さず聲掛て曲者待
と呼はる間も無く丁と打たる手裡劔を此方も目早く身と轉し袖に縫ひとめ再び又近
んとせしが自個さへ人目と忍ぶ身の上なれば口と訶みて佇立つ、獨り黙頭行んと爲
るを腰元共に手燭と執せ今と盛りて咲出せし牡丹の垣の後よりか梅の方へ繞り出暫
しと聲懸け逃んととる彼浮舟と呼止たり

○ 第七回

「呼留められて浮舟は疵もつ足の底氣味悪く應とは云ど落付ぬ容子と驚と打見遣か梅
の方は莞爾に「奥様付のお女中が奈なる御用か知ねども夜更も厭はず此か庭へ何ん
でお出に成ましますと問れて夫はと口籠りしが最進まきき浮舟も又覺悟定めて微笑み
「御道理なる其御説問奥と表の中垣を越てお庭へ参りしも此身に疎の宿願あつては
庭の隅に祀られ玉ふ塵沙門天と拜まんと態く深更に詣でし差別お仔細はござりま
せぬと云ふと此方ハ冷笑ひ「假令其身は宿願あつて毘沙門天へ詣づるとも嘗問ぬら
ちなら知ぬこと月さへ既お傾ふさて明るに程なきこの奥庭替つと事ごとごとんとなど
左右の女に目配爲るを心得顔に附人が「眞に貴様の質問の通りか表近き庭先忍び
男お逢ふためか但しは殿の在しをこそ御殿へ密かよ通ふのか何にも致せ胡乱の事サア
白狀を爲んせと退引させぬ手詰の難題迷れ家たる浮沈の瀬戸抵觸詰り詰りしかが浮
舟前へ進み出「成程夜更に此か庭へ忍んで妾が参りし故密男杯と引入て御家の法を



新月

犯せしかとれ質議かは存じませぬと妾に於てハ其様な浮たる事ハ聊か無く承はれ
 ば殿様が一室の裡へ押籠の果なき御身と爲れしも佞人ばらけ奸計と誰云ふとなき御
 殿の噂さ御恩を受し御主人様の固圍住ひに異ならぬ御身を争で救はんよハ正しき証
 據と得まほしと今宵宿直の目と掠め爰へ忍んで参りしなれと言ふは倍はとぞ梅の方
 肚裏に悟れど空耳ハせ「其身の罪と通れんと忠義ノ事と托へても人よこそよれ妾を
 ば欺かんとハ片腹痛し妾を女子と輕蔑て白状せねば栓し上げ痛いめ見せても言を
 が夫でも其方ハ強情にまだく虚言とお吐かど最悪さげよ云ひ懲そと浮舟聞て身を
 震ハし「假令非道の貴苦と受てもなんで無實ノ陥入可き女の身にて大膽にも主人を
 盗み出さんと死を決したる妾なれば夫程の事恐れは爲じいさ充分に遊ばせと恨の目
 尻引上げてね梅の方へ摺寄と最前よりして左右に別れ此間答を聞居たる兩個の侍女
 は顔見合せ「今御館よて飛鳥も落る威勢のお部屋さまへ詞を返を横道者わの樹の元
 へ栓し着け不義の對的を白状させ翌日ハつとめて御表へ引渡さうでは御座りませぬ

かとお梅の方を見かへれば此方へ頻りよ点頭て目配されば兩人が情け用捨も荒縄取
出し彼浮舟をぐる／＼巻傍へ松に拴し着け池の邊に咲出たる菖蒲と丁と抜取つ、
振鬪したる當座の答聲と合せて打据られ息も絶げに浮舟が無念の涙を洗みしかと思
ひ定めて一言の應答も爲ぬに倦みしか梅の方へ兩個に對ひ「はや曉も問も無れ
ば此奴ハ此儘此處へ置萬事ハ明朝與膳のへ妾が委敷傳えんに汝等二人も休息しや
と最尊大よ答と止め兩個を連れて奥殿へ入狭き月の蔭ならで命ちも細る浮舟が身は縛
めの縛し繩立ことならぬ羽拔鳥翅もほしと歎きしが屹度肚裏に思ふやう往昔も斯や
元信ヶ堂の柱に縛られしと終日嘆き我が足にて盡く鼠に精神いり忽ち其所へ顯はれ
て繩と食切り助けしとか夫ハ本朝未曾有の畫工我は果なき女流と雖も一念力は劣る
可き此繩切せ玉へ逆日傾信する比沙門天と祈りて突と身を起ると不思議や八重も結
びたる繩は切斷て落たるに予是は忝けなし尊としと伏拜みつゝ、裳裙と端折亂れし髪
を掻き上げて行んと爲し右手より四邊見廻し腰元の淺路ハ其所へ立出て「廣い御殿

は大勢の女中ハ有れど誰一人忠義立とる者無を日頃口惜しく思ふて居たと思ひ懸け
無い浮舟どの女子は稀な忠義れお意小蔭で残らず聞せしたか此儘茲に在る時は佞人
多きか節ゆる助けんものと懐中せし守刀で繩切りたれば何れへ成共落延ひ玉へ然
れど敵地も同様なる排ひを出んに刃物が無ければ後悔有んも慮れねば是ハ武職に贈る可
し持行玉へと差出とを推頂きて浮舟が「偕ハ根方に縛られし繩の不思議に切たのハ
我一念と思ひしは貴嬢が慈悲で在しとなまた年若き身ながらも御主を大事お懸け玉
ふれ意取も感心してさらば御身が教えの如く此小刀と腰も帶少しも早くこの場と立
退き忠義の操を立通さん然ば／＼と浮舟が暇を乞ひさへそこ／＼と忽ち築地を乗越
て下水口より忍び出行方知れず落失たり

○ 第八回

偕も愛妾お梅の方ハ答を止めて兩世を伴ひ我が住む部屋へ立戻り其翌朝の弗曉も起
いで彼浮舟と引渡さんと専々用意を爲と處へ一個の侍女が慌忙しく繩を引切り服走

せしと思吐敢を訴ふるよ子緯の破滅と驚愕して直ちに牛淵典膳等一味の武士と呼出し
 追手の人数と差向しが時遅々たる事なれば知る由無て諸共小兪引返し來りしかば胸
 安からず思惟せまか共少しも畏たる景容も無く忍びくく探索せしめ日數廿日も經
 過たるに此れ便宜も聞出さねバ忘るとには非れ共始めハ似ず拾置て以前は勝して
 典膳と不義の快樂と盡せしが實に隠とより顯はる、お梅の方の淫行と大方ハ早稲れ
 共權勢有よ畏れしか一藩擧つて膝を屈め阿容として従ひける茲に大領の良黨に金田
 朝負信家と云ふ者あり素より忠信無二にして志操恰も嵐の如く文學武藝に富みたる
 が近頃胃病に罹て起臥意裡に任せね我が閑室は閉籠り絶えて人にも接ざるよ長
 男錦三八其性極めて至孝なる者なれば深く之を愛ひ奈にもして父が病氣を本復爲し
 めんど聊かの隙あれば牛込神樂坂の毘沙門天へ參詣して丹精と籠め祈念とれ共未だ
 著るき効驗も見えず去逆重症よも到らねば神の揀護を仰ぐにありと信心愈々肝に
 銘じ送るとハ無く日と消光よ朝負は閑室を出され共大守發狂なし玉ひ幽閉の身とハ

られまもれ梅の方と牛淵等が逆意よ依て如斯爲しと思ふ物から一層の憂苦と増て熟
 々々と獨り心小思案を定め或時長男錦三と近く指きて借云ふやう汝既よ廿歳と越え忠
 孝の道と弁別へ殊勝なる舉動あるハ我が平常よ知る處なれば今大任と屬して主家を
 泰山の安きに措んとと汝父が詞を守り其身と犠牲として閩藩の方向と定む可きや奈
 よと問ふよ錦三小膝と進め「某曠味暗愚なれ共庭訓に倚て道理と知れり父今某
 として托とて大事と以てそ某の悦び何ぞ之に如ん疾く物附り玉へるべしと激奮を鞅
 負ハ暫えと押し止め傍れ文庫の裡より一通の密書を取出一是ハこれ此春慮らずも我手
 に入去密書にて緯の容子を知りしかば之と携へ大領へ言上なして悪人輩と放逐ん
 と思ひし中我斯く病魔に魅せられ回復の期と俟んとて恚る大事と捨置くは主に仕ふ
 る道よ非ぞ汝我よ代りて奸賊と除き大守の御代と爲し奉るべし然れども閩藩の景況
 皆悪人に左祖して忠良と存するもの最稀なれば怒ひ人を歸らひ道理と以て逐んと爲
 れば不思議の災起りて志と遂難からん汝帯とる處の刀よ問ふて能く進退と決

せよと涙と落して教訓せしかば錦三も父が意中の切なるを聞て頭を掻げ鼻打かみ
尊慮安かれ其不肖と雖も父が重き教えよ従ひ奸賊を平らげて家長の長久を慮り奉
るべしと胸を打て承諾為そに予鞠も強く悦び包み置たる金子若干と越前守助廣の
名刀と與へ何れへなりとも一先立越時節と俟つて本懐を遂よかしと猛くは云へど親
と子が生死慮れぬ一世の別れ踏殿父の遺興えし品々推頂きて錦三も僅かに膝と
立が弓跡へ心の曳るとば思ひ返して此夜さり父よ告別て屋敷を抜出何處とも無立去
りしと知る者絶えて無りしと予案下休憩に梅の方は我が設けたる若君の鶴若丸を大
領の家督願ひも首尾能く濟み彼典膳等と左右侍らし歌舞吹彈に永き日も猶短しと
啣ちざる榮耀も閑隙あざりしが此年六月十五日ハ山王權現の祭禮にて市中の雑沓
廣大なりと聞より典膳三平等の進めに任せ兼て屋敷に出入とる呉服商某が惣町
の住居なれど幼主鶴若を始めとして梅の方ハ艶麗な粧ひ侍女若燕を夥召具し彼店
投して赴きしが聞しに勝る賑はひを外珍らしき人々あれば互ひに興じ見物なると早

其事も果しかば主個の設けの一室へ請じ善美と盡して襖應なそうち迎ひの人數も來
りしにぞれ梅の方ハ獲應の淺からざると悦び聞え鶴若丸の手と執つて轎子よ打乗つ
、大名小路へ急がせ來る三宅坂横町より誰共知れぬ曲者が忽ち其所へ顯れいで
駕籠を目掛けて詰寄たり

○第九回

梅の方の籃輿の左右より従ふ供侍は等しく聲を振立て「汝何等の事あつて罷
籠に近接無禮と爲や言語は絶たる醉興人其所退かしと叱責そよ彼壯士ハ打笑ひ「下
郎の關る絆ならぬ願裂れぬ用心しると云つ、左右と突退けて進み來れる猛勢も荒
膽挫がれ一同ハ恐怖の念の起りしかき多勢と頼み些とも弱らず猶押隔て壯士と追退
ぎげんと構めくと面倒なりと罵りて忽ち柄に手を懸しが閃りと引抜刀の光りに疾や
是迄と若黨ども供の女中よ目配なし「爰構はずと御籃輿を少しも早くと聲懸けなが
ら各自一刀振懸し追取籠て討んと爲る意外に出たる騒動に侍女等は強く狼狽して中



間小者と急がしめて走り脱んと爲し程に壯士は血走る眼と見張りソレ遣つてハと猿
 臂と延し擡げ上たる輿丁の襟がみ取つて引戻すと然ふは爲じと前後より組着き懸る
 を振拂ひ突のけ岐のけ一丁餘り堀を沿ふて追かけしが未だ日れ昏て時間も無きよ此
 日の祭事を見物して家路へ歸るも多けれや噴噴嘩よと散動て右往左往又雑沓なと人
 よ混入て壯士は駕籠に近づき大喝一聲「汝等命ちに掛替有て我が手裡と避んと爲る
 やと頭上よ雷の落るが如く奮激四邊を拂ふる勇士の言葉よ最前より憶病風の誘ふ
 たる下郎等何か堪ゆ可き駕籠を捨置き一目散に跡をも見ずして逃行くを見遣りて
 莞爾と微笑駕籠に手と懸け一刀を突通さんと爲たりしが俄然意怯れしか但しハ思ふ
 旨ありしか石を引明けてお梅の方け警掴み引摺いだし刀と胸よ押當がひ吐嗟見る間
 よ思の音を止めんと爲しがさし昇る隈無き月よ面を合せコハソモ奈よと仰天なし堅
 く捕はし拳も弛み「お家と奈乱とお梅の方今日もくり無く祭禮の見物あるぞ聞しよ
 り歸りと俟うけ討果さんと斯くわ肚裏を竭せしも目的の敵よ似もやらぬ抑々汝は何

者なるか見覺えのある鑑與なり殊よハ館の徽章も有れば必ず疑ひある可からずと死
 力と奮ひ近接れと万一若君よ過害ありては臍を噬ひとも甲斐なしと白刃を拵へて躊
 躇しが慄慄らざりしハ汝が洪福命ちは助け取せんと緯の次第を物語れと無念も最と
 ますらとが屹と睨付け詰寄るに女ハ始終打戦き絶て言語も出ざりしが數回問れて漸
 くお轟く胸を押鎮め「妾は賤しき端女にて上れ容子は分らねども先刻御家老典膳と
 のより何事やらん忙しく言ひ越されぬと承りしが夫より歸りの道と換へ迎ひよ越
 されし供人隨へた館さして歸られしが此鑑與へは妾が乗り跡より靜かに戻れよとの
 差圖よ隨ひ参りぬのみ命は助け玉ハれよと啣言がせしく打詫るに楮ハ碎音喰違ひ我
 が謀殺の機密を悟り裏の裏ゆく逆臣どもがよく予斯くまで計りしな進莫一念力
 の岩とも通と例えもあれを早晚刀は鏢として今日の意恨を晴とべし覺へて居れと立
 上り砂と蹴たて、走せ去りけり

○ 第十回

大名小路の館にてハ當日驟か典膳方へ密告なせし者あつてお梅れ方を暗殺なぞ結
 構なまんも圖られじと確かよ明て打隣き時と選さす笹川へ密事れ始末を認めし書翰
 と携帯せてた梅の方へ密かに通達爲し依り忽ち一ツの手段と旋らし我が目標ある
 籃輿へは端女某を乗込せ自個ハ若君鶴若丸と典膳方より差越えたる護衛の者も前後
 と圍ませ道と轉じて歸りしを供に立ある女中の裡も心付ぬが多のりしとハ實も遅
 々敷婦人なりと後陣に残りしと夫ハ諸置三宅坂にてた梅の方の橋へ白刃を向し壯
 者お追立られたる典丁どもは逸足出して館へ歸り途中の椿事云々と詞短かく演舌な
 そよ豫て期したる典膳ハ故意と驚愕く面持なし笹川三平横堀藤藏其外徒黨の壯者に
 下知を傳へて急が立るも各々心得駈け付て三宅坂まで來りし頃ハ疾や曲者の影
 も無く端女某が十方に昏行立居るを見懸しかば無異を祝して折助どもに空しき橋と
 釣らせつ、館へ歸り着まかば此夜のうちに一味の者共皆諸共ニ書院に集合額を病し
 て談合なぞよ諸坂童齋進み出「情も危ふき今宵の凶變膳典どのよハ奈にして憚る機

密と逸早く察せられしは重疊至極と云ふも典膳院と打咲み「其御不審ハ道理千方
 今日慮らずも我家へ壹個の下郎尋ね來て拙者へ密かに面會なし大事と訴申さんと最
 愼しく云ひ入るハ必定事由ある事あらんと我が閑室へ相招き一部始終と訊問なすに
 彼は元來我が輩の平素よ忌憚る朝負よ仕へさし思願の者なりしよ主と恨る事故有
 つて朝負が日頃の行狀及び彼ケ長男錦三へ家重代ハ佩刀と與へ屋敷と脱走せしめ
 しは我々共と暗殺なぞ密謀なりと語りし由是は捨置れぬ一大事もしもの事のみ
 んには後悔そこに立難しと直ちに一封書認めお梅の方へ言上せしに案よ違はぬ途中
 の狼籍誰とも未だ定まらねど大方朝負が一子なる錦三と云ふ曲者なる可し依て此以
 後何様の變事有んも慮られねば各員意中と打明て所存と悉一物語られよと座中を屹
 と見渡そよ何れも顔を見合せて有無の答辞も爲ざりしが三平僅か小膝を進め一嫩
 にからやば斧と持つ憂ひありとハ古人の金言萬一一家中の者共が朝負と心と一ツに
 爲し敵對なれば由々敷難義たハ人知れず打果え先づ一方と片付て忍びくよ錦三れ

行衛と捜索ならぬば何條知れざる事有ん今更猶豫する事かはと憂た、きて賢びよ
 述るを聞て一同も皆三平に同意なま俱に從通て止ざるにう典膳 屢 打合点「今よ始
 めぬ笹川氏の勇氣ハ殆ど感心せり然れば左せん右せんと猶密々と該合果或る夜風雨
 の烈しきよ乗じ笹川横堀二人と伴ひ朝負が住ふ長屋に至り庭の木戸より忍び入雨川
 蹴放ち打入るに物の響きも聞えぬ奴婢等も心付ざると得たりや應と奥深く朝負が
 居間へ込み入りて床に臥しある朝負を押伏せ其胸元を突んと爲るよ病苦に惱めを剛
 氣の朝負透逸く足と踏固め暫く挑 戰 ひしけ精神挽み思ハすも眼も倒ふる、肩先と
 切下られて果なくも無慙の最期を遂まか心地善と悪人共ハ聽て其場と迷失たり

○ 第 拾 壹 回

案下休憩浮舟は下水口より道れいで直ぐよ我家へ行んと爲しが追手の懸るハ必定な
 れば再回愛目よ逢ふ時ハ年來竭せし眞意も管に齋餅となる而已ならず愈々以て大領
 の御身の上も氣遣はしと左や右思ひ煩ひまが自個か叔母の花溪ハ霞ヶ關の御主殿な

る國姫君に仕へし以降警と斷ま尼となり今は橋場よ庵りと結び名も松月と改稱て行
 ひ清して居る事故之を便らさ世と忍ぶよ屈竟なりと思案と定め乱れし髪を手早く整
 ね町家の子女が假初に外出爲したる形容となり漸くよして城門を越え足に任せて急
 さしかを慘酷さ管よ肢體も漆桶み殊更人目を厭ひしかば心とも無く時後れて橋場の
 寮へ來りしは疾や黄昏の頃なりしに斯く共知らぬ庵主の松月持佛よ對ひ燈と点じ老
 の手首力無に蚊遣火鉢と携へいで静と椽先へ押直し芝挿し焚る後ろ身嬌しや無事
 在せしかと胸撫下し浮舟は折戸の外より聲懸けて其儘走り入しかば尼は驚き振返り
 「軒吹く松の風の聲夕べを送る鐘の音より問ふ人も無き葎の宿門違ひばし爲玉ひそ
 と余所々しびふ應答なとを浮船然そと會釋して「同家にハ育ちしものども宮仕へして
 十年餘り絶えて御目に懸らねば見忘れ玉ふも道理至極致ハ大領正道公の館へ上り今
 も猶彼館よ存ぞ奉公の寸隙も無て御疎遠よ打過ました浮船なりと云ふに庵主は再び
 驚き「老の双眼の腫る氣よて夫とも意着ざりし是は不意接近なれ疾く此方へと先に



立ち親まき交も改まる主人設けの花席備りさまうと坐に就て主客互ひも果しなき
長物語りに夜は更て亥の刻近く鳴る鐘と筭へつ、も松月尼ハ意に安堵ぬ面持して「
問ふ可き事も聞く事も濱の眞砂に盡さば其は緩々と打語らんが何は儲値さ此座り
と尋ねて来しには事由ある可く任せぬ戀よ身を措きかね屋形と脱て来りしか叔母よ
は何の遠慮も無し包ます様子を吐してよと慈愛も籠る一言よ浮世塵く打点頭「妾
が浩る姿よて端無く音信まいりし故然思さる、も無理ならねを妾が今宵脱け出まハ
容易なまざるお家ハ大變と言ふも庵主は四邊と見廻し「浮世離れし孤家ありとて壁
に耳ある里諺もありを窺かよ目と以て意と通し等しく立て内外を隈なく窺ひ坐よ戻
り浮船聲を打秘め之より大領正道公が梅の方と寵愛なし逆臣牛淵典膳等に幽閉せ
られし事どもを洩無く告て又言ふやう「妾至愚の性なれを武家に仕ハれ祿と食み女
ながらも忠孝の道理を聊か存すれば夕べ御殿へ忍び入り大守を盗出さんと稍や中庭
まで至りしに思ひ懸け無きお梅の方よ見咎められて云々と咎を受し件んより爰に來

りし千辛万苦の一部始終を演述しかば叔母も昔附は大諸公に契よ仕へて長刀の一手
も覺悟のある者故殊勝の言葉も莞爾打咲思ふお勝ある和女の翠動今の意衷と忘失す
よ天晴賢女と云る、やう猶此上にも身を謹しみ時節と俟て本意と遠よと大方ならず
打悦び是より爰小隠匿置しを知る者絶えてあらざりけり

○ 第十 二 回

茲は橋場の片傍りに家業も夫と定め無く色と酒とに身を持別し善ぬ事よ日と経過
る千太と云る曲者あり彼その以前武家よ仕へ劍術柔術と知る面已か力量飽くまで強
くして心も究めて猛かりしに今戸山谷に破落戸ハ等しく千太を恐れ親分なりと
稱へつ、愈其乾兒と成しかば之より漸次は虚勢と張り良家を虐げ黄金と貪り賭博に
耽るを業として悪業扱りに増長せし彼の何の間に見認めしか自己が住居も遠か
ぬ松月庵に浮船の隠れかるをば窺ひ知り諺らひ奇らんと計れども女でこそあれ松月
尼ハ素より行狀堅固にして侮り難き者なれば却て毛と吹き疵を見る後悔有んも麻



月

られじと手出しも爲らず程過ぎしが折節千住の近住よ此れ賭博の出来しと聞き千太
 は乾兒と引連れて彼所に至り日を暮し豫て股肱と委信たる金助彌六の兩人と人無き處
 へ招き寄せ松月庵に隠れ居る彼艶麗婦を我手よ入んと種々よ心と苦しむれを詞を以
 て語ふ共請引れぬは必定なれば一層手早く引繰り昇出して思ふ儘日來れ望みと適へ
 んよ汝等我よ力らを添へ首尾能く行ば一隙の褒美と與へ其上に一箭づ、は振舞ふか
 ら此相談に乗るめへかど云ふに件んの兩人は片頬よ笑て打點點一鱗よ及やず承諾な
 し猶も手筈を施しつ、道引違へ別々に松月庵へ來りし頃は夜も漸やくよ更闕て子の
 刻近くなりしかば白晝さへ淋しき場末の孤屋葉末よ鳴く虫け音と止めて人よ悟られ
 など三人各自前後へ廻り金助彌六の兩人は外牆と破り雨戸を外し庵主ヶ臥たる一室
 よ入るに恚る可しと八夢知らぬ熟睡なしたる松月尼は寐返る時よ枕邊よて物の響き
 の爲しけるを何事やとんと起上る目先に閃めく白刃と白刃左右等しく請寄るに驚嘆
 と八爲れと松月尼ハ平常の女子に似合しからず心飽くまで雄々しき故其儘其所へ居

直りて「御身ら何等の事有りてか案内も乞す夜る深更闕を越て忍び入り殊も白刃と携ええは云ふまでも無き竊盗ならんが見る、如く茅の軒竹の柱の厄の宿佛の袋の供養米布施の鳥目若干の外よは絶えて無き物をも云せも敢ず兩人は目と怒らして近接双の腕確と取り「多辨云せず疾々と云より早く早く懐中より豫て準備したりと覺しき繩取出し縛あげ聲を立なば切殺せんと恐喝して庵主を引立ゆき納戸は奥の押入へ破と突入れ戸を固め再び此方の浮船が臥房の次室まで忍び寄り窺かよ寐息を考ふるに目覺し様子も有ざれば僥倖と歎伏てそつと襖と推明る此時橋子と吹旋る風が誘て燈火のぼつより消る眞の呼吸と斗り兩人は彼浮船が熟睡せし夜具に手を懸け引越さんと能々探れは是は奈に主へ空しく在され共蒲團に寝る温氣に遠くは行まじ追駈けよと周章き悶着して後邊より叩へし千太に報知共此家を駈け山さんと冉めく兩個が鼻先へ刃を丁と突付けて鋭き聲と振紋り「汝等鼠賊一寸も其所動くなと云ふより疾く潑矢と切込む手練の太刀先無兼や彌六の肩先より乳の下懸けて切り下げ

られアツと叫びて仆る、物音こけ叶はじと金助が活路と索めて逃んと爲るを道り過しつ、振上げし刃の下に金助が生命も忽ち失んとせしと臂に手と懸け後邊より力らよ任して刃をもぎ取り振向く處を丁と突く拳の刃よ悶絶するを得たりと上に乗懸り点燈々と云ふこそは正しく今宵の大將軍千太と知つて金助ハ蘇生なる心地なし漸くよして燈と点し千太ケ馳せし豪傑と何者なりと兩人が暗と定めて能く見れば是を日頃の戀人なる鮑婦浮船なりけるに予其勇敢も舌と捲き只と呆れて對向つ、詞を出さで在けるが人音せしよ打驚ろき千太ハ馳て浮船の扉より引かけ後口より金助共俱逃失けり

○ 第 十 三 回

諸も橋場の博徒なる界漢千太ハ同類の金助諸共浮船を宙に昇つ、松月庵の裏手の方より逃出せしが此夜は月の有る筈なるに宵より雨の催ふして光線を掩へばほの暗き畔道傳ひと辛ふして稻荷の杜まで來りしかば兩個は馳て浮船と芝生へ下し汗拭なが



ら首と延きて前後を見れども人形影もあらざれば僥倖よしと打歎び即絶なして放
 流き彼浮船の鳩尾へ手を指し入て窺ふに氣と失ひしのみにして素より性命も別條無
 れば千太ハ聲とうち秘め「漸の思ひで爰まで引出し日頃の望みを遂るのほ嬉しいけ
 れど此儘でハ死人に等しく興なければ奈も爲して蘇生らせ納付づくでしつぱりと
 抱いて寐松と思へ共女も似合ぬ腕前よて不便や彌六は此女の爲めも敢然く命ちと落
 したるさる恐ゆしき女ゆゑ腐々それは何様を馬鹿と見るかも知れねへから斷然斯ふ
 して性体無く倒れて居るをお互ひも慰んだ上殺戮て仕舞は跡腹病ぬ夫のみか彌六の
 爲めにハ當座の仇を兩個で打たも同様なればナント然ふとる積りは如何だと云ふに
 金助屢々點頭「實に要心が簡要なれば非廣の這入ぬ其中に少しも疾くと促して千太
 を頻りに煽動たて既に危き場も臨と哀む可ま浮船は恰も熟睡せし如く兩箇が爲めよ
 自由よされ耻かしいめを受んとせしが神明佛陀の冥助や有けん忽然として精神復し
 我も歸れば曲者の言語に絶たる舉動なるも何かハ少しも躊躇せべき女なほも強氣

の浮船眼暗んで恍惚なる千太と丁と返返しそつくと立て聲荒まげ「最前の手續も性
 懲り無く重ねて無禮と働らく兇漢疾や此上ハ用捨ハ爲ぬすと云ふに千太は冷笑ひ「
 先刻彌六が討れたは不知案内ハ眞暗闇云は油断の過ちなれど夫も即座よ此千太が突
 出と拳に腕くも斃れ既に性命の無い處と此方よ少し注文あれば態く「致まで昇で來
 て思ひと暗と到底極に蘇生たは此方の幸ひ可不可無しに抱れて寐るか夫とも達て腕
 立てば飛だ二枚目敵さだか可愛さ餘つて憎さが百倍生み殺しみ充分に懸つた男の一
 念を暗と云ば夫迄なれば野暮を云ず自由になれと飽くまで廣告で金助に詞を懸
 つ、浮船を再回芝生へ押倒さんと競ひ懸ると振拂ひ飛鳥の如く身と轉し些共身邊へ
 寄せ付ねば恐喝して心に従はせんと千太は刃を閃りと引抜き切て懸るに浮船ハ心矢
 竹も慄慄ども身に寸鐵も帯びざれば次第く引退くを透さず千太が切込ひ刃にさ
 しもの浮船さへ兼はや討れんと爲る處へ傍への敵より聲をも懸す突出したる漁料
 の猪が千太の頭へ臨むと等しく力らよ任せて引倒されワット叫びて振上し脇差か

らりと取落とて浮船得たりと走り寄り彼脇差と取るよと見ゆしが千太の首へ懸て放れ地上へ礮と落たりしは金助強く仰天なし叶はぬ免せと一散道を求めて逃出せと已れ何條逃とへき止まれヤツと聲懸けながら追はんとしる洋船と暫しと止め竹藪と推分けなごら静やかに先づ半身と懸へしたり

○ 第 十 四 回

竹藪押分立出る一人の壯漢が浮船を止めて冠りし手拭いと股で此方へ進むれば何者なるかと見返るよ折能く曇りし空も晴れ月皎々と差昇る限なき影も透しつ、愕然として浮船が驚きなげら聲低め「御身は曩日よ父上の不興と受てお館へ立退れしと聞及びし朝負どの、令息なる錦三ぬまよ在さずやと云ふ聲高しと手と以て止め「奈にも自個へ錦三なり情何よりや承はらん思ひ懸けなき此場の現況抑々御身只獨り活る處よ在とさへ最心得難きよ惡漢共と戦はれし次第は奈にと尋ねしかば持る刃と投捨て浮船漸く進みより錦の始終を具に告げお梅の方の毒手を免かれ松月庵の叔母が

許よ潜み隠れし次第より今宵の凶變云々と事遺漏無く囁き示し何は兎も有れ長居して再び彼等の出来らば由々敷大事なる而已ならず叔母松月ヶ身の上も氣支はしけれハ兎も角も我住む庵まで御出有つて足ハぬながを妾が思案もお聞なされて下されよと物も動ぜぬ浮船が雄々敷答辭に錦三は屢々感じて打点頓定に然なりと云ひなが等しく其所を立離れ月を便りに畦道を歩みながらも錦三は頻りに額を撫ながら「思ふに勝しまる御身の才覺言ひ合さねど我も又其夜御殿へ忍び入り御中庭まで到りし時誰やら居合せ妨げしと御身なりとは露知らず築牆を越て逃失しけ是は是自個が一人の心よ出て我父も知ぬ秘事なりしが以後牛淵典膳等お梅の方と諸共に御家を亂そ隠謀の専々父の耳よ入り其上去る頃お梅の方より逆臣牛淵典膳へ送りし密書が故有つて父の手許よ有し故證據を上げて悪人共の根と斷ち築をも枯さんと思ふ物から病惱の苦惱次第も重り行覺束なしと思ひよけん我を招きて膳典等と打果せよと重代の刀を與へられ去により某し直ちに館と脱け出悪人共を殺戮して御家の無異を計ら

んと竊か況時節を俟折しもお梅の方が山王祭りを見物の爲め廻町へ赴く由を聞出し
 是幸ひと足場と計り三宅坂よて轎子へ刃を向し甲斐も無く愚かや彼等よ謀られて無
 念の涙だ乾かぬうち父の朝負は何者よか敢なく討れ死したる由風の便りに知りし
 かば必定典膳お梅の方の指揮よ出て惡徒輩の非道の刃に懸れしと我大方よ推察し
 恨み重なる惡人共の首を並べて君と父れ恩義よ報ふよし有れと形容を種々よ扮且つ
 、忍びく〜に手段と設け彼等が他行を窺ひしよ彼棟梁なる典膳へ近頃茲より遠から
 ぬ石濱と云ふ片傍り誰が家なりや知れざれど折々其所へ通ひ來て彼が好める夜網と
 曳き船に一夜と明とこと度々なりしと聞し故借こそ今宵も見らる、如き漁師に扮且
 其所此所と川邊を尋ねし歸り道不思議よ御身の危難を救ひ名乗れや一ツ館よて忠義
 此心最深き御身よ廻り逢ひしれば微思を天も感能して合せ玉ふと思へるれど行末逆
 も頼母し杯一部始終と物語り跡になり又先になり松月庵まで來りしかる浮船は突と
 馳せ寄つて最前金助彌六等が崩せし垣より潜り入り木戸の戸明よ錦三を誘と計りに

案内し先きに惡徒が點したる蠟燭の火の絶えく〜なるよ便りと爲して坐に就かしめ
 自個ハ其所此所見廻りて叔母の所在と尋ぬるに納戸の方に物音して呻叫聲せしか
 ば萬一過まらて怪我せしよと心も空に走り入り音を知邊お押入の戸を引明て覗へ
 無慙や叔母の松月尼は細引を以て縛しめられ聲立ぬやう手拭と口に銜せて有しかる
 驚きなのを救出し手早く細引手拭もどく〜勁り介抱せしよ我は販りて松月尼も
 姪が無事なる姿を見て悦びあふ事限り無く頓て一室へ立出て彼錦三よも對面なし忠
 義ハ劣ぬ主客三人が互ひよ頼ひと突合せ奈なる舉動を計較や次回と讀て知り玉へ

○ 第十五回

却て説く愛妾お梅の方は嬖臣牛淵典膳等を語らひ謀略圖に中りて主君正道と押籠め
 若君鶴若の世と爲し上見ぬ驚の虚勢を張り典膳と不義の密會を遂げ無上愉快を執る
 と雖も正室夏姫君有りては兎角よ心の儘ならぬ奈にもして之と失ハんと種々に謀略
 を廻らせざるも便宜を得ざりしかば或時典膳を招き件んの事を説きて其助けを索むる

典膳暫らく首と傾ふけ漸くにして云ふやう奥方と計らん事は最易きよ似たれ共お
 里方のお績さある閑老某候は聰明の君あれば若し某等の苦計なる事と知しめさば
 是迄の大望徒らに首足を全ふせる能は玄患れば容易に手を下し萬一の危ふきお近よ
 らんよりは寧ろ時節を窺ひて十分に爲果んと態と今日迄黙止したり然れ共某し一
 個の計略を思ひ付きたれば御身何氣無き体よてお奥に至り云々計らひ玉へを某し等
 ハ亦別よ手段と設けて陥入奉り日ならず館を遠ざけ奉らん事何の難き事有らん
 と奸智に更し典膳が意中を盡して演述せしかばお梅の方大い悦び「何事も御身ケ
 智囊に洩るゝ事無し然るを早々に計議と施してよと堅く約して立別れしが之よりし
 てはお梅の方ハ是迄と違ひ展々奥殿へ至り奥方の案否をき、或は種々珍ら敷物と奉
 り其心を慰さめ「妾ハ賤しき身なるを殿の御寵遇を蒙り若君の正母さて多くの武士
 に傳かれ榮耀よ一期を送る事皆之殿の御厚恩なれを此御恵みを報ひ奉らんと思ふ
 よ甲斐無く押籠の御身の上を爲らせ給ひお痛ましうハ限り無く少じも疾く御本服有

かしと神佛お祈誓とかけ絶て一日も怠りたる事無し況て奥様の御歎き如何よお在ま
 せらん妾の心に引較べても中々よ優る共劣り玉ふまじ杯言葉を飾りて聞ふる程に怜
 惻けれども夏姫君は梅の方の奸計なりとハ聊かも知し召さねば憂と慰さむ使とも
 思して折々ハ我が招きてお梅の方と殿の御上と語り明し玉ふ事ありしかばお梅の
 方は時節來れりと打歡び猶も其心と執らんとて或日見事なる花籠を自ら更て御奥へ
 至り是は此頃妾が差圖して作らせ侍りあるが御心結ばれ玉ふ御慰さみ共爲らんかと
 て猷上る成と云ふに夏姫君強く悦び玉ひお居間の側はらへ置して常に寵愛し玉
 ひけるとぞ恚てお梅の方ハ亦もや典膳と招き妾御身の進めに依り常よハ疎き御奥に
 至り奥方に咫尺し詞と巧みて欺き近寄あるに始めは氣疎き容子なりしが今は早全く
 妾と頼母敷者と思し何事も語らひ玉へば此機と失ハす速かに釋と計らひ玉へと云ふ
 よ典膳打台黙然らば是より静かよ兼ての手段と施す可しと計らひ便宜と伺ふに奥方
 付の女中の内ハ花里と呼ぶ者少しの落度有て館を放逐せられんと爲しと典膳様々に

取扱らへ之と救ひ出し折と見合せ我が心服と物語り汝が我が輩の力らとなり計議
も開りなを必ず夫程の報酬爲可しと云ふも何が儲けられたる恩義あれ一義にも及
ばず典膳に一味し御奥の事何異と無く逸々典膳へ告げ知をせしかば悪人共ハ工夫を
凝し計議に油断無りしとぞ

○ 第十 六 回

去程に牛淵典膳はお梅の方と苦計を計較夏姫君と追立て心付儘又大領の館の構威と
我獨り占有なさんと様々に之が手段と索めしが元來正しき奥方も多少の落度も見
ぬ玉はねを早や此上は手知に押片付んと奥女中彼花里へ言ひ合め典膳が手に
廻はし其頃淺草猿若町なる劇場市村羽左衛門の抱へ役者の某(汝あつて名を願ふ)
も多くの金を與えつ、夏姫君の住はる、御殿へ屢々立入らせ遂に無き名を掩へせて
自ら御身を退せんと空恐敷企て爲しお梅の方と言ひ合せ時の來ると伏たりげり情
も悪事よ加膽せし彼花里ハ典膳の紹介に依り市村座の歌舞妓役者の某を我が住む

部屋へ人知ず招きて件の手替と定め其日に至らば斯くと耳に口寄叩き告げ若し此事
が整へず御家老様より共許へ夥多の褒美と賜はる由妾へ話説も有たれば必ず手落の
無いやうよ首尾能く仕遂げて給へれと堅く誓語て立別れ密談爲し荒増を典膳方へ言
ひ送りし故典膳得ありと打微笑事疾や成ぬと悦びて之より自個が同類なる笹川横堀
諸坂等へ我が計略を説示し此頃奥方夏姫君の御殿へ忍ぶ曲者あり察する處奥方ハ
大領幽閉なしたまひ閨淋しさのやる方なし男と引入れ憚らず樂しみ玉物也杯と最
喋々敷流言させしを悪徒の偽謀と知らざれば家中の諸士も何と無く鯨立て奥方の
摸様と窺ふ者もあり昨日よ今日と日増して風聞愈々高くなれど此趣きと奥方へ洩
ざるやうよ計らひしかば夏姫君ハ知る由なく折柄秋の最中よ月澄渡る高樓の欄近
く立出給ひ隈無き蔭は見給へども姥捨山の月ならで思さめ兼つ愁然と太守の事を案
じ危び佇立玉ふ其所へ一ト間の内より花里が静々として進み出「何事やらん典膳が
夜中ながらも奥様へ御目通りを願ひたしと錠口迄廻られ升たが如何計らひ宜しき

やと云ふ夏姫不立「晝とも違ひ今頃に奈なる川事か知らざるけ余人は格別典膳
 は大守も常々頼みに思ふ重臣なれば障りハ有らじ疾々召せと宣ふに花里唯々を引
 下り程も有せず手燭を執り先に立たる花里が案内に連れて牛淵典膳御前近く平伏な
 し奥方様へ某方窺か言上爲そ事有りて夜陰も辞せず参上せり併し他聞を憚れば
 か付の衆ハ近時の間ね次へ遠慮召さる、やう仰せ付られ下されたしと思ひ有けし隙
 しかば夏姫君ハ訝しながら花里の外一同又次へ立よと宣まいて何等の事か申して見
 よと仰せ典膳脚寄「事改めて某が言上申そに及ばねと大守ハ不慮の御病氣にて
 一室に閉居遊やされ憂き日を消光せ玉ふ事疾や一年に及べ共疾快玉ふ御形容無し連
 臣等一統安々と枕を高く臥そ者無く御家の安危を心配爲そ容易ならざる御時節なる
 よ此頃君が御寮所間近く忍び通へる曲者ありと誰言と無く言詢々意外の取沙汰致せ
 ども是は奥方を忘憚る佞人共の譏言なりと耳も留す捨置さしが日を経て益々甚だ
 しければ若し此事が御寶家其外當れ館に御一門親族方の傳聞有らば事實は兎もあれ

御家は瑕瑾と憚りながら存じ升れば御謙みか肝要かと典膳存じ奉ると詞巧み演
 述なと舌の刃ヲ恐ろしき奥方は餘りと思ひ設けざる証言なれば少選は左右の應答も
 爲し玉はず差俯ふきて在せしが靜かに此方へ座を進ませ「實に下様の壁の如く石の
 立られぬ人の口言へば言る、事乍ら大名高家の身を以て下人に等しき夫重ね男欲よ
 逆最繁さ人目れ關を忍び越え操を破り淫奔の所行有らば我のみか家の大事を身も關
 る第一汝の過誤ならずや淡き女子の淺々しき胸も理非の明らかなる憚る果なき浮
 言を虚々聞て自らへ賢ら顔に諫言なと家長たる其方の心の底も見え透きたり然は
 有すやと莞爾よ道理を押へて論破せし賢き詞と事共爲す典膳形容と改めて「某し不
 才の性なれどか家の危急存亡を我身も關る職分なれば事實の有無と糺さずして御體
 みが簡要なりと申上しは拙者の寸志然るを普迪の道理と以て達つて知らずと宣まハ
 後共言す此席にて證據と顯はし御覽に入ん浩ても抵觸玉ふかと詞鏡く言放つを
 奥方猶も打笑み玉ひ「主人に對ひ其方が斯まで言よハ仔細有ん遠慮に及ばず證據

れ品と妾に見せよ仰せ下言にや及ぶと典膳が御床の間に飾りあるお梅の方より差
上し花籠目懸丁と打扇子を台圖に一聲叫び彼花籠と押破り顔へれ出し壹人の曲者牛
淵と見て驚き慄れ慌忙と廊下の方へ一目散に逃げ出ると向ふの方より大勢の女中よ
手燭を執らせつ、従容として立出るお梅の方へ懸元に目配なしたつ曲者を押へて縄で
打たせたり

○ 第十七回

無慙なるかや奥方へ悪人輩の計較は羅り思ひも悪ぬ濡衣を乾と由も無き袖の雨の絶
て晴間は無りけり典膳ハ仕済し顔み彼曲者を引据させ「汝は何なる者なれば此大
奥へ忍び入り不義を働かぬ大膽不敵猶吟味する事有れば汝へ曳せ乱問せんとお梅の
方へ目配せ爲るをお梅の方は疾くも噤り「何事やん大御奥の輪縁かしきよ捨置難
く参り合せし廊下にて怪敷者と見認しゆる引捕へハ致せ共承はれば奥様のお居
間は忍び居りたりとか目前を以て推時は不義の證據と見ゆれ共奥方様に其様な淫な

事の有る善なし之は何んぞ容子の有る締篤と浮吟味有まほしと挨拶なして奥方を
千般慰さめ殊勝げに我が住む方に立戻る蔭見送りて牛淵も曲者立と繩拾取り先よ立
せつ奥方と尻目に懸て表の方へ立出て行其跡よハ不時の騒ぎよ多くの女中夏姫若の
前後よ侍り只太息吐く斗りなり浩と奥方は素より伶俐き性なれば是ハ悪人の計較に
て無き者よ爲ん其爲よ恚る始末と爲し物かとは思へ共我が居間より怪敷者の頭ハれ
出捕へられたる事なれやお梅の方を始めとして家中の思はく奈ならん若し疑ひの解
やらで汚名と晴す時無は何而目に存命ん曇らぬ心の潔白は死ぬより外よ詮無しと覺
悟の晴と固めつ、一室に在つて文認め懐刃を逆手に執玉ひしが信と心に思とやう覺
へ此文差置くとも悪人輩に執り隠され心狂ひて死しあり杯云ハる、時ハ末代まで我
が悪名は雪ぎ難しと言つて誰とても油断ならぬば虚々を猥りよ人よも托されや什麼
に爲ましと思案の折柄日頃寵愛爲し玉ふ小笹と云る手飼の狎が姫の身邊りへ來るに
て是幸ひと人間に物言ふ如く言ひふくめ彼書置を與へ玉ふに聞分けたりや一ト聲は



ハ

又忽ち口よ咬へつ、何處共無く出行くに心安堵て取直し刀を咽喉に押當て玉ふ心の裡ぞ痛はしき

○ 第十八回

借も奥方にハ世を果なみて自殺せばやと思惟れしかば手飼の狎し酒書を奥へ西方よ向つて合掌なし既に刃を突立んと爲し給ふ時次室より慌忙立出て「是は奥様よは何故よ千金の身をむぎくと御生害をば遊ばしますかマアお止まり遊ばせと欄る者を見給へば是奥女中花里なるにう「妾が自害は其方も必定過般聞たて有ふどう分疏を爲と逆も我が一室より曲者の立顯ハれし上からハ無實の罪よ父君の御名を下し取餘様へ何面目に存命て他し浮世よ佳果ん覺悟の上の此自害其手離してよと宣ふと花里只管詞と勵まし「お意弱き甘仰せ正しく君に意恨ある後人共の計らひと知つて其儘御自害あらば玉より清き御心を誰汲分けて冤罪の汚名と雪ぐ者あるべき標悍て恥辱を重ねんより一屏館を立去り給ひ忠義の武士と語らふて驚と御詮議遊ばしませ

然も無き時は此上は何なる計較も陥入給ふも計り知られぬ館の光景猶衆ふ時でハ
ござりませぬと諫め願はる心根ハ善か悪のハ白露の消る期急ぐ與方も道理めろ花
里の勤めに力泣々も稍や承諾ハ承諾ながら何處を的所とも定め無く怒ひ館と脱け出
て却て憂目に逢はんも知れぬば死るも生るも此館の外へ行のハ好まじからむと立出
玉ふ御景容無きゆる花里猶も比喩と惹き詞と盡して説き賺し明なば人目の憚りあり
闇きに紛れて妾が方へ一ト先づ御供爲したる上突々事を計ふ可し老早々々立せ給へ
よと聞がし立て主従二人支度調へ忍び出何處とも無く落行きけり話分懸橋場なる
松月庵より浮舟と館の忠臣錦三等々額と合せて談合爲奈にも爲えて棟梁なる彼牛
淵と暗殺し太宗と救ひ出さんと心は同じ主客三人が閑談時と移し、のち暫く有て浮
舟が此家へ最前曲者の忍び入しと思ひしかば襖の蔭に俟伏して一人ハ手に懸け殺し
、と思ひしうちに搔搔はれ跡の容子を知らざりしが錦三ぬしの助力よて歸ると其儘
叔母御前の介抱に氣を奪はれて殆ど忘れて居りましたと云ひつ、雪洞片手は持つ衣

の居間より到りつ、隈無く捜し索むれども血汐の塵へ引くのみにて敵ハ其所より有ぞ
れば倍ハ重症と負ひしよ、我が櫻はれし其跡にて逸失たりしもの爲らんと思ひなが
らもなよと無く心よ懸て座敷に戻り叔母松月と錦三に件んの越さ呷き告げ左右爲る
うち遠近にて八聲の鶏の鳴ひしかば後日と約して錦三ハ我々住家へ立歸り忍びく
に典膳が漁獵に來ると窺ふうち其年八月十二日よは月よ乗じて典膳等が夜綱を曳と
の報知を聞き錦三太く打悦び其日と遅しと俟つうちに疾や當日よも成ければ宵より
身軽く拵且て中洲の遊りに伺ひ居ると知るや知れずや典膳は三平藤藏其外の間小
者七八人二艘の船と漕合せ笑ひ興じて居る光景更に余念の無き容子よ天の與へと錦
三ハ蘆間を分けて走り出豫て用意の小船よ打乗り棹さしのべて近づきたり

○ 第九回

借も金田錦三ハ典膳等の乗組たる二艘ハ船へ漕寄と身を隠させて飛移り太刀眞甲に
振舞し典膳目懸けて斫付るよ頃曲者よと罵り騒ぎ各自太刀を抜連て只壹人の錦三と



解川江前

八折

中に取籠め討んと爲る浪は閃めく白刃の光りは風は亂る、尾花の如く奮激突戰時移れども更に勝負も分たぬうち天色驟かに暗くなり雨さへばつく降來るにう激も味方も途と失ひ慄慄て欲込む所の外し力餘つて船端に墮き倒る、錦三と起しも立す左右より等く砍り込む及ばと拂ひ二足三足飛退く時如何なしけん錦三は足儘らして濺つと立つ浪は落入り引沙に體も止めずなりしかば惡人共は拳と握り思ひ懸なき狼籍に一時は狼敗爲したれ共既に目前討果を機會となりしに水中へ落入たるは殘念至極併し不思議な壹人れ死傷も無きハ洪福なりしと皆同音に叫きなが各船と返して立去りしが典膳坊かと思ふやう意外に出る今宵の變事もお梅の方を殺害爲んと三宅坂よて興子へ狼籍爲したる錦三の所業なるやも計られず忌れば我々兩人と暗殺なごん結構あると知つて此方に豫め備への無は怠慢なりとて是より太く懲罰なし叨りよ館の闘を越わす藝も奥方夏姫君が花里と言ふ女中と俱に館を脱出せられしよりは心小懸る震も無く誰憚らずお梅の方と密通なして威權と振ひ自酒よ從ふ者共を皆夫

々に取立て眞逆の時の股肱と爲し富貴親樂極り無く榮耀に其日と消光りしとが家下休題大領正道公は奸臣の計較に罹り久しく一室に閉籠り鬱々として在せまが腰元淺路が忠義の志操と嘉みし故意と狂氣の体になり給ひしかば毒惡の鋒先を避け無事に光陰を経過給ひしに秋雨傾り降りて四邊寂莫たる折柄像て見覺えある小笹と云る狎何やら一封の書翰を陸へ一室の入口に來り懸ふる事あるが如く一聲吠て立去りしかば大領ハ不審ながら彼一封と取上げ置き其詰朝密かに披き見給ふに是奥方が死と極めし遺書にして惡人が手段の始終と詳らに書綴り現當の縁ハ薄く其未來の契りと祈る杯哀れも悲しき水莖の跡ハ涙の露時雨ふり懸りたる横難は我のみならず奥方にも疾や生害に及びしかと悲歎に昏て在せしが斯く惡人の蔓延ては何を限り一室を越て出可き便宜もあらねば淺路よ付て竊かよ忠義の武士へ我意を傳へ遁れ出るよ勝と事無しと思案を定め夫よりハ折と見合せ居られしに或る日少しの便宜を得て淺路に件の事由を陳べ汝什麼も我意を含み多き家來れ其内にて志氣ある者有らば語ひ合

せ今日の艱苦を救ひ呉よかしと宣ふ言葉も痛ましく後路へ履打點踏き斯く淺く敷き敷き身の上も成ませ給ひし其後ちの館の模様ハ云々也と詞短のく叫き告げ「妾ハ奥の浮様子を別に聞知りやさね共奥方様には何故か此館を御立退に成しめて其お行衛と捜し、由渡れ聞ありしが只今の仰せも依れば奥方様の御死去と隠そ手段にて斯く云ひ觸せし物なまん仰せ無くとも妾も亦及ばずながら命ちを捨て多年の御恩に酬ゆる心底時節をお俟遊ばしませと答へて頓て立去りけり

○第廿回

話説復舊情も奥方にハ腰元花里が依辨に感へされ玉ひうまてや彼が勤めに依り隠人の鋒先と避んとて或る夜館と立退れしかば花里は始終の手段思ひの儘に整ひしと悦び我が兩親ケ神田お玉が池の邊り住めば兎角して勝なり奉り干般に慰さぬ申せし程も遂も術中に陥入玉ひしに花里ハ密かよ一封の書翰を認め典膳方へ通達して猶其差圖と俟ながら聊さかも景容に顯へさす眞實しく立働らき居りしのは然斗りの

計較あり共知し召れ最頼母敷思ハれつ、憂き日と爰に消光れしが此方ハ例の牛淵が奸計頗ぶる圖に中り夏姫君と花里が伴ひ出て隠匿れく事共都て行届きしが故意人とは走らせて其お行衛と捜索させ猶父實家何某家へも絆の趣き云々と洩無く報道なせまよそ思ひ懸げざる大變なれば彼方様は素より論無く閻老方も聞及ばれ其筋を経て江戸市中を隈無く探索せられしゆどもそよとの風の音信絶て新垣迎ふ文月の十六日と成りにけり恁て花里ハ此夕邊奥方よ向ひ聲低詰つ、云ふやうハ御館の騷動より玉の臺よ引換て賤が伏屋よ忽体ない潜みて在せば萬づよ付御心解る事も無く思ひ惱ませ給ふのを朝夕見請けまいらせて御痛ましさも一沙なれば畫の内こそ人目も厭へ夜に至りなば近き涉りよか供なとともけしらい有じ疾く思ひ立せ給へしと云ふに奥方打点頭草木の風も心措く脱走人の身に異ならぬ浮世と忍ぶ身の上なれば暗が間しきは好まねど其方ケ然程に思ふなら開は更も角もと宣ふに花里悦び能やうに衣装を打扮諸共にお玉が池に我家を立出儘かに隔ちし柳原の堤に出しは宵なるよ未

だ其頃ハ此邊に多くの夜發が立顯はれ往來の人を誘ひて草の庭と假寐の床に情と
 ぐ者ある故中間小者或は又商家の手代丁稚なき業見ずゆきに打群て驚きまで賑や
 かなれば主従彼所此所逍遙つ、憚る所は長居して不慮の變事の出来たらば後悔ぞ
 共甲斐なからん誘歸らんと元來し方へ取つて返せし其折ある手拭眞深に冠りたる大
 の男が兩人の往手に突然立出しが遮り止めて物とも云はず夏姫君と小脇お抱へ堤の
 邊へ馳せ去るにぞ花里太く打驚き若し彼君と失ひては身の分説の立ぬと思ひ一生懸
 命追ひ掛て彼の大男の帶際を無手と掴みて引戻すと片頬に冷笑ひ腰を捻て振解き遣
 り違ひては身と轉し其儘走り去らんと爲るよそ人よ知らせて幫助と求め取返さんと
 ハ思へ共我身も忍ぶ身上なれば毛と吹て疵を見ると云ふ世の俚諺と目前りよ心端ま
 もうた方の泡となりなハ残念なりと思案と極め聲さゆ立を隠し持たる懐胎と彼曲者
 の脇腹へ柄も通れと突懸るを彼方も曲者目疾く避け一間三り飛退しかば空と笑ふる
 花里ハ力餘りて躓き倒れ我が刃とば誤ちて疵腹へぐさ突込しに才呀苦叫びて打伏

しゑり

○ 第 廿 一 回

彼大男は奥方を傍邊に下し冠りたる手拭執つて手負いよ向ひ「緯の起因と告げされ
 ば奥方始め和女も驚ろかれたる事ならんが我は先頃を館と脱走なせし錦三なりと
 云ふに手負は月蔭に左視右視透して顔打守り「寔は御身は錦三ぬし何故今宵奥方と
 引撥はんと爲られしか知らずば兎もあれ主従を知つた狼りの衆動せしは心得難しと
 花里が重庇と恐れず詰るとハ錦三頻りよ打點頭「不審は道理某が今宵の始末と奥
 方始め和女も聽て玉へる可しと云ひつ、手負の側へ寄り今改めて云ず其和女も豫て
 知る如く昔日に替る館の光景佞人共が漸次よ聲延り勿体なくも大領を一室よ押籠奉
 りお家と紊亂と奇怪の事共胸に餘りて口惜ましく我が身命を打捨て悪人共を殺戮せん
 と種々に心と碎けども未だ運命ハ竭ざるよや我忠 心 隙の隙と食違ふたる戀心念
 に堪へず割腹して相果んとハ思へ共心と籠めて與へる父が紀念の一ト腰よ思ひ返



して今日までの命は生存有たりしに此頃不思議も聞出せしハハ梅の方が奥方を偽謀
 り参らせれ館を和女と共に追ひ出せしと正かお知りて打堂を忍びくく御行儀と尋
 ねし誠心神佛も茲に怖れみ玉ひしか今宵端無く御目に懸り飛立如く思ひしかば和
 女に告げて奥方と我が住む方へ御供せんと思ひしか共愁ひに御身へ實と明しなば春
 野の雉子聲立て已が在所と知らそに等しく仇と打つ迄世を忍ぶ此錦三が仕家とば御
 身は耳へ入まじと思ひ過して眞實なる御身も重傷を負せしハ悔て返ぬ身の過誤ち
 海容して下され花里との始めて明を猛夫の言葉も惜はと花里が差俯ふきて聴居た
 りしが「世も稀なる錦三ぬしの忠義の心と悲哀なる我身の上と明白も語るも而無
 き事ながら典膳ぬしの思義を受け道ならぬとは知りながら女だたらに徒然の裡へ敷
 まへられじと嬉しく思ひ奥の機密と告げ知らせ義ハハ怪敷曲者を奥へ忍ばせ奥方様
 へ無實と負せ奉り夫のみならず典膳どのと密かに約せし事あれを故意と思義も見
 せ懸けて御供爲まつ我家へ立退たりしは館の内も思義と思ふ者有つて奥方様と見付

け出し若し人質をも爲せならば悪事の露顯と典膳が深く計りし奸策并に依頼て花聖
がお主の鹿略も思ふたる天罰忽ち報ひ來て忠心無二の御身に迫り思ひ懸け無く我と
我が及ぶ生命を殞さん事前生よりの身の罪業最口惜く恥かしく面を向く可き様な
けれど極悪不忠の花里が聊か罪を償ふ一ト品是受収め玉はれと懐中探り取出て八惡
人共が密議の席へ携ふ割符の印鑿よて是だに持ば御殿の裡を自由に通行致せとも誰
も咎めハ致しませねば何んずの御用に立つならむ是と御身へ参らせん去ばと斗り懐
劍と逆手よ取つて咽喉へぐさ突立て敢無くも路上の露と消失せ散際清き逆葉の湖
りよ染ぬ心根と債が不便と奥方も錦三も亦歎息して彼印鑿と押頂き人目一懸らぬ其
内に少しも疾くと奥方の手と取りながら堤と下り河岸よ繋ぎし小船よ打乗り橋場の
方へ漕ぎ行きけり

○ 第 廿 二 回

浩て忠臣金田錦三ハ慮らむも柳原の堤よて奥方夏姫君と侍女花里よ邂逅しよ花聖談

つて其身と學きしが遂に錦三が忠膽義魂と聽き先非を後悔して館へ出入の鑿札と選
輿し卒然息絶しかる奥方も錦三も少透歎息して佇み居りしが人目一懸らば一大事と
奥方ハ手と曳き纏て河岸よ繋ぎ置る小船よ乗じ自ら船を操りて奥方をば橋場の松
月庵へ伴ひ参らせければ庵主松月尼并に烈々浮舟の兩人も夢かと計り打悦び悉しく
上座よ請じて其恙なきを賀し什麼にして御命と立出玉ひと右左りより其事故を問
ひ奉りければ奥方には典膳等が密計と以て俳優何某を奥殿へ忍ばせ开と落度とし
て無實の汚名を受しめ腰元花里を語りひ故意と館と立退せしは忠義の輩へ人反よ
奪はれじとの意匠なる趣きと今宵花里が進めりて近傍を漫歩せし事共遺り無く
物語り玉ふに錦三其語を繼ぎて我は又花里と忠義の者なりと思ひし事より我身の在
所も告す奥方を御供爲んと云ふ共彼必ず承諾問敷若し亦在所を明し惡人共に知られ
てハ大望ハ妨げと思惟し聲とも懸す奥方をは引提はんと爲し事花里が擱り止めて自
ら刃一觸れ我が始終の談柄と問て忽ち過ちと改め鑿札と附與へて空しくなりし件ん



の趣き具よ告ぐるよ兩人ハ驚き且ハ悦ひ是より茲ハ隠匿をいらせ心を竭して侍奉
 つりければさしもの悪人共も其在所と知るよ術無く只其儘に打過けるが錦三は是迄
 お梅の方と典膳と暗殺なし大守を救ひ奉らんと或る時ハ三宅坂よ待伏してお梅の
 方の籠輿を覗ひ又或時は墨江川よ典膳が夜漁と襲ひ千般肚裏を掴ましたれども天未
 だ定まらざれば本意と違とる事能はずまた館へ忍び入て大守と救ひ出し奉らんと
 欲するも然る可き方術無きよ苦みしに今回不思議に花理より館の籠札を得しかば萬
 一人よ怪まれあば此籠札を差示し夫にても適ハぬ時ハ切死なして潔く相果んと覺
 悟と極め或る夜奥方始め松月浮舟等へ我所存を打明し心太くも大名小路の館と投
 して来りしが未だ夜も甚く更ざれば御門の裡へ紛れ入り彼所此所と立忍びて夜の更
 行くと相俟つに疾や刻限にも至りしかば室内知つたる館の内外篤と目濟し中奥の玄
 關脇より忍び入り漸々に近付け共用心甚だ暖しくて容易に絆の逃げ難けれや天を仰
 いで歎息なし某斯くまで心を尽し大守を救ひ奉らんと茲まで来れど此儘よ志望

を果さず止む時ハ何を限りも無き親の遺命と果と時有ん若し見頭ハ百年目今更恐る
、事かハと度胸を定め拔足して間毎々々々と踰え行くよ忠臣無二錦三と神も護らせ玉
ひけん幸いにして人目も無く大守と押籠まわらせし一室の此所へ來りしに予胸撫下
し息と吐き頃此時と失ハじと進み寄んと爲る處へ思ひ懸け無く一人の艶麗嬌顔を背
けて行んと爲る金田が前へスツリと立ち雪烟差出し右視左視て「怪しや殿の御寢所
近き出入堅き此奥殿殊さら夜更に立越しハ什麼何者ぞと聲懸けられ見付られじと思
しかば用意の鑑札取出し差示さんと爲たりしがなましひ彼是隙入てハ本意を透る妨
碍なり一刀恐喝して呉んずと物とも言ず大刀引拔雪燈灑矢と斫付るを彼者は早くも
其身を避け「慄悍玉ふな錦三ぬしと云ふに此方は打驚き然云ふは誰ぞと訝のりつ、
能々見れば浮舟より豫て聞きたる淺路と云ふ眞實の有る腰元なれば「是は不意淺路
どの某浩る扮且にて忍び入しは云ず共夫と推する由有ん導き玉へと低語云と淺路
は點頭四邊を見廻し「妾も疾くより大領の御せを受し事有ば一室を破りか館と御供

爲して立退んと幾度思ひ定めしかども若し仕損ずる事有らば我のみならず大領の御
身の上も如何やと思ひ返して年月を徒に消光し今月今宵御身の幫助と得るからは所
人心を一ツに爲し多年の本意を達せし勝此所へと勇み立何れも劣らぬ忠臣義女が
首尾能く志望と遂るや否や次回と俟て説き分く可し

○ 第 廿 三 回

諸も兩個の忠臣義女の四邊へ心奥まりたる大守の居間へ伺ひ寄り淺路ハ馳て典膳よ
り預り持し錢取出て懸かぬやうよ戸口と開き最良々と進むとば大守は岸破と跣起玉
ひ「何者なるかと宣ふと淺路は手と以て押し止め「殿て妾が御供爲し此か館を連れんと
種々に肚裏と苦しめし何を云にも女兒の甲斐なさ思ひ苦そのみ徒らよ打過ぎあり
しよ慮ずも千騎に優る幫助と得しかば斯くは忍びて参りしなり先其人と濃覽せと云
ひつ、傍へよ身と避ければ續て進む錦三が是迄盤せし始終の様子と粹濃も無く聞え
上げ疾や御供して立退んと慄悍と大守は點頭玉ひ「忠義一途の心より茲まで忍び來

りし事我が満足ハ此上無く直にも立退く心得なれを我一國の主宰として臣下の爲
艱苦と請け汝等始め忠義の者へ幾層の苦等を懸た事は之愈不徳の爲すわさなれば行
未逆も頼み無き我を思ひて國を破り若し願れば汝等よ非命の最難と爲せん事奈よ
も以て不便に思へハ只打捨て憐可しと宣ふうちよも堪へ兼たる錦三淺路の兩人は大
守の左右よ平伏して「臣等よ願はせ給ふなる賢慮は餘りよ勿体無く詞と返し奉る
も最障りなる事ながら今に至りて御心弱く女々敷成せ玉ひてハ何れれ時か御本意を
お達し遊やそ折有る可き忠義れ爲にハ豫てより命ちハ抛ち無き物と覺悟致せし我々
が心盡しと哀れ共思し召なば少しも早く此館と御供して知音の方へ詣ませ玉ふと
何許以て願はしけれと涙と共に兩人が諫め願はせ玉ふと殊勝さ大守も漸く承諾玉ひ「然
程に思ふ汝等の忠義と書簡に爲ん事ハ之人君の道ならず奈に汝等よ勝はれ立退く
事は立退く可きが用心殿敷此圍みを何等れ計較を廻らして容易く進れ果らる可き覺
束無しと宣ふを淺路ハ打笑み進み出「曩日妾へ云々と仰せの有し其日より退て心よ

密計あれば今宵命田が我君の御供爲して其屋形と首尾能く立退く折よこそ思ひ當ら
せ玉ふへを何ハ共も有れお支度をと懸て身軽く出立せ御手と曳て錦三は御庭口の切
戸を破り奥と表の櫻門まで通れ來りし時とはあれ奥よ當りて忽然と火の氣起るを見
るうちよ火勢恰かも矢の如く早八方に飛移る思ひ懸なき騒動に家中は潮の音如く上
を下へと悶着なしさしも奸智よ抜目なき牛淵なれと途を失ひ四方の圍みを解しかや
往ハ淺路が懸重なる圍みと破る手段にとて跡に止まり火と放ち騒ぎよ紛れて落行け
と斯ハ斗りしものなるか生死も知かず立去るは最も遺憾の事なれ共可惜時刻と押移
し恐人共の目裸に懸らば之程までも主君と思ふ彼が忠義も無に爲んと思ひ返して錦
三ハ大守を急がせ奉り老若男女の東西に馳せ達ひゆく其中へ交りて辛く御門を離
れ虎の腮と免れし如く大名小路と跡よして龍の口なる園老の某候の邸に到りぬ

○ 第 廿 四 回

人盛んなる時は天に勝ち天定まつて人よ勝と宜なるかな大領正道の賢臣牛淵典膳と



四十五



川

愛おか梅の方と通じ多くの佞人と心合せ思ひの任に不義の歡樂を盡せし忠臣金田錦三等が百折千磨の勞苦と嘗め該夜大領と奪び去り何方へ逃げ失しか絶て踪蹟を知るに由なく刺へ腰元淺路は表領と誤り脱出さんとして殿内より火を放ち火中へ投じて自死せしに予意神竊かに驚歎し惡人共と徵集へて公邊向のれ届方お家中の仕置を談合爲れ共夜前よりの騒動に各個眉と蹙て居れお左右の詞を出そ者無茫然として有ける處へ思ひ懸無く龍の口なる彼閣老れ車臣たる高岡節三郎入來り昨夜館の出火に付些御不密の事故も御座れば牛淵どのを始として笹川横堀兩人共拙者と同道致されて主人方まで御出有る様差圖と受て參向せりと最殿そかゝ演述ならに予疵持足の惡人共は互いに顔と見合せつ、只管慄き畏れしかど嚴命あれば是非も無く使節も立し高岡の後に附從立出しが程無く來り龍の口閣老辱敷れ真門より内玄關と右に見て廣書院まで昇りしに暫く爰に俟つ可まると云ひ捨置て節三八奥の間投して立入りしが嚙て再び出來り何やら書し壹通と三個の前へ押並べ威儀を正して聲振立、今日御邊

等三個と主人の屋敷へ伴なひしハ余け義に有ぬ一大事定めて御邊等覺悟の有ん包ます其所よて演られよと云ふに牛淵其他の者ハ驚つさながら眞顔となり「高岡氏よは何故に我々共に不密を抱かれ何を我尋問なする、予と空嚇を高岡ハ右祝左祝て冷笑ひ網裡の魚に異なぬぬ今日に成つてもさまゝと目個の罪と隠さんとハ惡事と計較膽力おは似合ぬ比與の振舞なり然らば某箇條と逐ひ逸々礼問致さんと彼書附と手に取上げ第一無病健全なる主人大領正道を發刃なりと云ひ觸し一室へ誘ひなしゑる事より梅の方と密通なりお家の重器と奪ひし事交川院に賄賂と送り其實跡と掩ひし事忠臣金田朝負と暗殺なせし非道の事併圖米と館へ忍ばせ夏姫君を冤罪に落し終り館と放逐せし事并びに夜前出火の際腰元淺路の自燒の事其折大領正道の行術知れずよ成ある事彼是渾て拾三ヶ條洩なく返答致されよと云れて夫は口籠りたる三個ハ各々赤面なま背よ汗とかきたりしが道る、丈ハ云ひ問さんと典膳少し生席と進み「思ひ寄らざる貴殿の仰せ正道公の發狂有りしハ疴僻強き質にして多年藥餌を賜



進せし童齋杯の醫論も有れば奈なる變事有んかと君家を思ふ某が止む事を得ぬ所
置にいで毛頭不忠と存せしならず亦御愛妾お梅の方と姦通なせしなんと、ハ餘りよ
意外の御不審にてお答へさへよ苦しむのみ亦復朝負と暗殺なし俳優某と館へ忍ませ
夏姫君を放逐せまると判然あたる御質議なれど是らも素より覺は無く只我々が怠慢よ
て昨夜非常の禍ひ起り正道公の御行衛を失ひしのみ人臣の道に欠たる不所存なれば
此義は何共恥入て面目次第も之無しと非と理に曲る典膳が辨伎利口よ云ひ紛ふと此
方の一室押開き静々来る人々を見るより三個ハ色青ざめ恐れ入て居たりける

○ 第 廿 五 回

今此席へ入來りしは何者なりやと見て有や則ち大領正道にて後に引添ふ金田錦三靜
々として立出ししかばさしもの典膳三平等も事の勢ひ合期為す只と呆れて顔見合せ言
向も出ず控ゆるを大領靜かに坐に就王ひ「奈に典膳能く聞かし汝其年若しと雖も我
又思ふ處有つて年頃厚く扶助為せしに我が然斗りの恩義を思はず主と謀つて榮利を

索む大逆無道と振舞ながも恚ても伴り陳するやと宣ふ言葉も惡徒共は疾や是までと
思ひけん典膳始め三平等も交代よ白狀なし忽ち罪よ伏せしかば節三錦三兩人は走り
懸りて一同の腰刀をばもぎ取りつ夥多の者が前後と圍み大名小路の館へ引行き何れ
も假りの廊舎よ入其年師走の押詰めよ皆斬罪に處せられしハ心地善かりし事なりし
が是より先にお梅の方は奸謀既よ露顯よ及び一味の者は童齋まで一人も洩さず就縛
と成りしと聞より情は我上なりと已れぬ儲けし鶴若丸を欺き隙して刺殺し返を刀に
我が咽喉と刺貫きて死なありしは惡の報ひと知られたり恚て大領よハ金田朝負ケ非
命よ死なれたると恤れみ其後錦三が稀なる忠節を稱え父が遺跡形の如く賜はり加ふる
に今回お恩賞として新地三百石を加増へ腰元浮舟ハ其叔母松月尼の元にも有けると夏
姫君と諸共お館に迎へられ錦三が妻よ玉はりまかば忠臣節婦は君恩の忝なきに益
々志しを勵まし奉公等閑ならず又淺路が年來眞實に大守と勤りたるのみならず館
と立退れしも偏へよ彼が忠死の致と處ちりと其親族の者へ夥敷追賞の黄金と玉ハ

善を顯へし惡を懲り上下日出度春を迎へしとぞ

雪解川浪絶終

明治十八年二月九日御届
同 四月 日出版

定價金四十五錢

編輯兼出版人

野村銀次郎

發兌元

同所 閨華堂

同 瀧野屋

人形町通り大時計下

同 鶴聲社

横山町二丁目

大 賣 捌

通三丁目
 横山町三丁目
 芝三嶋町
 米澤町
 馬喰町二丁目
 神田淡路町
 南傳馬町
 通四丁目
 大傳馬町二丁目
 馬喰町二丁目
 馬喰町四丁目
 長谷川町
 南傳馬町二丁目
 銀坐二丁目
 一橋通
 通二丁目
 馬喰町三丁目
 兩國廣小路
 石町

丸屋鉄次郎
 辻岡屋文助
 上田屋榮次郎
 鈴木兵衛
 山口藤兵衛
 春陽堂
 内藤加我堂
 三宅半四郎
 井上茂兵衛
 小森物次郎
 武田平次郎
 つとむや
 山口福松
 深山江堂
 自瀨由次堂
 大磯野平

横濱野毛町
 横濱
 越後
 陸前仙臺大町
 陸前仙臺大通一丁目
 横濱本町四丁目
 大坂本町四丁目
 陸前石巻
 函館大町
 同地蔵町四丁目
 越後長岡裏一の町
 常陸土浦宿町の町
 同水戸市泉町
 甲府常盤町
 同八日町二丁目
 阿州徳嶋中通町
 加賀國金澤尾張町
 伊勢國津京口町
 静岡傳馬町
 同札の辻角

佐野屋富次郎
 萬字屋
 大橋文吉
 木村幸七
 池田屋真七
 岡嶋利兵衛
 三陸屋利兵衛
 常野嘉兵衛
 田中嘉兵衛
 大橋新兵衛
 柳且新太郎
 柳且本太郎
 内藤傳右衛門
 西川庄右衛門
 坂井萬吉
 牧野作平
 都野文作
 北川茂右衛門
 長谷川金七郎

地本問屋同盟組合

出版書目

農務局 御藏版 下總種畜場事業問答筆記 附録共全二冊 洋本 定價一圓
 景清 外傳 義民の譽 全 同 一圓廿錢
 佐倉宗五郎 義民の譽 全 同 一圓廿錢
 高橋力士 舊猫傳 二冊 同 六十五錢
 村井長庵 大岡仁政錄 同 同 四十五錢
 千代田城 樽白波 同 同 四十五錢
 霜夜鐘 十時辻笹 同 同 四十五錢
 斐陀 匠物語 同 同 四十五錢
 馬琴 小夜中山石言遺響 全 定價三十五錢
 馬琴 佐野常世物語 同 同 四十錢
 著 新纂解脫物語 上下 定價四十五錢
 怪談 牡丹燈籠 全 同 六十錢
 貓奇談 佐賀廻夜櫻 上下 同 六十錢
 成田不動 靈驗筐篋仇討 全 同 六十錢
 眞徳丸 白狐の白菊 全 同 四十錢
 俠客國定 忠治實錄 全 同 四十錢
 北雪美談 金澤寶記 全 一冊 定價八拾錢

馬琴 賴家阿闍梨怪鼠傳 全 同 八拾錢
 種彦 淺間嶽面影草紙 全 七十五錢
 雪解川浪の葩序 同 同 四拾錢
 極附幡隨長兵衛 同 同 十五錢
 選音 曲集 同 同 三十錢
 天すの種本坊 全 同 十二錢
 繪本 銘々水滸傳 上下 同 十五錢
 本朝 歷代忠孝鏡 全 同 十五錢
 明治 英勇名婦鏡 同 同 十五錢
 新撰 曲消歌種本 全 同 十五錢
 新撰 ねみな 全 同 十五錢
 右之外 稗史小説ハ申ニ不及内外新書ヲ
 出版シ諸彦ノ貴閱ニ供セントス乞フ愛
 願ノ諸彦陸續御購求ヲ願フ
 但御注文之節ハ前金御送附可被下候

東 京 圖 書 館

和書門

類

一函

七架

二四號

一冊



特43

111

川浪社

柳葉亭 繁彦

091522-000-8

特43-111

雪解川浪葩

柳葉亭 繁彦 / 著

M18

DBN-2511

